秋田県文化財調査報告書第471集

月 見 堂 館 跡

－一般国道46号角館バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－

２０１１・７

秋 田 県 教 育 委 員 会

シンボルマークは、北秋田市白坂（しろざか）遺跡出土の
「岩偶」です。
縄文時代晩期初頭、1992年8月発見、高さ7㎝、凝灰岩。

月見堂館跡（つきみどうだてあと）

－一般国道46号角館バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－

２０１１・７

秋田県教育委員会

序

本県には、これまでに発見された約4,900か所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した彩り豊かな文化を創造していくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、日本海沿岸東北自動車道をはじめとする高速交通体系の整備は、地域が活発に交流・連携する秋田の創造をめざす開発事業の根幹をなすものであります。本教育委員会では、これら地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、一般国道46号角館バイパス建設事業に先だって、平成22年度に実施した月見堂館跡の発掘調査成果をまとめたものであります。調査では、縄文時代の土坑・配石遺構、中世の竪穴建物跡・掘立柱建物跡・かまど状遺構と、縄文時代の土器・石器、中世の陶器などが発見されました。

本書が、ふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行にあたり、協力をいただきました国土交通省東北地方整備局秋田河川国道事務所、仙北市教育委員会など関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成23年7月

秋田県教育委員会

教育長　米　田　　進

例　　言

1　本書は、一般国道46号角館バイパス建設事業に伴い、平成22(2010)年度に発掘調査した仙北市月見堂館跡の発掘調査報告書である。

2　調査の内容については、すでにその一部が埋蔵文化財センター年報などによって公表されているが、本書を正式なものとする。

3　本書に使用した地形図は、国土地理院発行の50,000分の１・25,000分の１『角館』、国土交通省東北地方整備局秋田河川国道事務所提供の1,000分の１工事路線計画図である。

4　調査区の基本層位と遺構土層中の土色の色調表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帖』によった。

5　本書に使用した空中写真は、昭和24（1949）年米軍撮影によるものを（財）日本地図センターより購入したものと、株式会社シン技術コンサルに撮影を委託したものである。

6　第５章「自然科学的分析」は、株式会社パレオ・ラボに分析を委託した成果報告である。

7　本書の執筆と編集は、栗澤光男と高橋和成が行った。

凡　　例

1　遺構番号は、その種類ごとに下記の略記号を付し、検出順に通し番号を付したが、後に検討の結果、遺構ではないと判断したものは欠番とした。

ＳＫ・・・土坑　　ＳＱ・・・配石遺構　　ＳＫＩ・・・竪穴建物跡

ＳＢ・・・掘立柱建物跡　　ＳＯ・・・かまど状遺構　　ＳＤ・・・溝跡

ＳＫＰ・・・柱穴様ピット

2　調査区の基本層位にはローマ数字を、遺構の堆積土には算用数字を使用した。

3　挿図中の遺物番号は、遺構内外の出土を問わず通し番号を付し、図版中の番号と対応する。

4　土器の表裏を採拓した場合は、断面の左側に裏面、右側に表面の拓影を配置した。表面だけを採拓した場合は、断面の左側に拓影を配置した。

5　挿図に使用したスクリントーンは、下記のとおりである。

焼土

炭化物

釉

凹石の擦

凹み

砥石の擦

目　次

序
凡例
目次
第１章　はじめに …… 1
　第１節　調査に至る経過 …… 1
　第２節　調査要項 …… 1
第２章　遺跡の環境 …… 4
　第１節　遺跡の位置と立地 …… 4
　第２節　歴史的環境 …… 6
第３章　発掘調査の概要 …… 10
　第１節　遺跡の概観 …… 10
　第２節　調査の方法 …… 10
　第３節　調査の経過 …… 13
　第４節　整理作業の方法と経過 …… 15
第４章　調査の記録 …… 16
　第１節　縄文時代の遺構と遺物 …… 16
　　１　検出遺構と遺物 …… 16
　　２　遺構外出土遺物 …… 22
　第２節　中世の遺構と遺物 …… 24
　　１　検出遺構 …… 24
　　２　遺構外出土遺物 …… 34
第５章　自然科学的分析 …… 37
　第１節　放射性炭素年代測定 …… 37
　第２節　月見堂館跡出土炭化材の樹種同定 …… 40
第６章　まとめ …… 42

挿　図　目　次

第１図　路線と遺跡 …… 2
第２図　工事計画と調査範囲図 …… 3
第３図　遺跡位置図 …… 4
第４図　地形区分図 …… 5
第５図　月見堂館跡(26)と周辺遺跡位置図 …… 7
第６図　調査区の基本層位図 …… 11・12
第７図　月見堂館跡範囲図と周辺地形図 …… 13
第８図　グリッド設定図 …… 14
第９図　遺構配置図、柱穴様ピット配置図（１） …… 17・18
第10図　柱穴様ピット配置図（２） …… 19
第11図　柱穴様ピット配置図（３） …… 20

第12図　ＳＫ02・97、ＳＱ05、遺構内出土遺物 …… 21
第13図　遺構外出土遺物（１） …… 23
第14図　遺構外出土遺物（２） …… 24
第15図　ＳＫＩ106 …… 25
第16図　ＳＢ52 …… 27
第17図　ＳＯ01・03 …… 28
第18図　ＳＤ06・07・08・96・98 …… 30
第19図　遺構外出土遺物（３） …… 35
第20図　遺構外出土遺物（４） …… 36
第21図　暦年較正結果 …… 39

表　目　次

第１表　月見堂館跡周辺遺跡一覧 …… 8
第２表　ＳＫＩ106柱穴観察表 …… 25
第３表　ＳＢ52柱穴観察表 …… 27
第４表　柱穴様ピット観察表（１） …… 31
第５表　柱穴様ピット観察表（２） …… 32
第６表　柱穴様ピット観察表（３） …… 33
第７表　測定試料および処理 …… 37
第８表　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果 …… 38
第９表　月見堂館跡出土炭化材の樹種同定結果 …… 40

図　版　目　次

図版１　１　遺跡遠景上空から（真上）：昭和24年米軍撮影　　２　遺跡全景上空から（真上）
図版２　１　調査前の様子（西→）　　２　調査後の様子（西→）
図版３　１　遺跡遠景上空から（西→）　　２　遺跡遠景上空から（北東→）
図版４　１　ＳＫ02（東→）　　２　ＳＱ05（北東→）
図版５　１　ＳＫＩ106（南→）　　２　ＳＢ52（南東→）
図版６　１　ＳＯ01（南西→）　　２　ＳＯ03（南西→）
図版７　１　ＳＤ96（南東→）　　２　ＳＤ98（北西→）
図版８　１　縄文土器出土状況（東→）　　２　縄文土器出土状況（北東→）
　　３　ＳＫ02凹石出土状況（北→）　　４　磨製石斧出土状況（北西→）
　　５　陶器〔擂鉢〕出土状況（北→）　　６　陶器〔皿〕出土状況（北→）
　　７　陶器〔香炉か火器〕出土状況（南→）
図版９　出土遺物（縄文土器）
図版10　１　出土遺物（石器）　　２　出土遺物（陶器）
図版11　１　出土遺物（陶器）　　２　出土遺物（砥石）
図版12　月見堂館跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経過

一般国道46号角館バイパスは、秋田県と岩手県の地域間交流の促進、現道隘路の解消及び観光交通の円滑化と観光産業支援のほか、観光シーズンや国道105号との重複区間の混雑時における交通渋滞の緩和などを目的として平成９（1997）年度に事業化された路線である。この路線は、仙北市田沢湖小松字羽根ヶ台を起点に同市角館町西長野字月見堂を終点とする延長6.1kmの地域高規格道路である。そのうち、平成22（2010）年７月31日までに田沢湖小松字羽根ヶ台から角館町雲然間の4.6kmが完成して、同区間の供用が開始されている。

なお、計画路線内には埋蔵文化財が包蔵されている可能性があることから、道路工事に先立って国土交通省東北地方整備局秋田河川国道事務所より、文化財保護法に基づいて埋蔵文化財包蔵地の確認と今後の対応について、秋田県教育委員会に調査の依頼があった。これを受けて秋田県教育委員会は、平成12（2000）年度から平成21（2009）年度まで計画路線内の遺跡分布調査を実施した。結果、計画路線内に周知の遺跡である月見堂館跡が存在することを確認した。このため秋田県教育委員会は、今後確認調査が必要であることと、確認調査の結果、記録保存が必要な場合には発掘調査を実施すべきことを回答した。以上の経過に基づいて、平成21（2009）年度に確認調査を行い、翌平成22（2010）年度に発掘調査を実施するに至った。

第２節　調査要項

遺　跡　名	月見堂館跡（つきみどうだてあと）　遺跡略番号：７ＴＭＤＤ
遺跡所在地	秋田県仙北市角館町雲然字山口69－１外
調査期間	平成22年５月24日～７月14日
調査目的	一般国道46号バイパス建設事業に係る事前発掘調査
調査面積	1,500㎡
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	栗澤　光男（秋田県埋蔵文化財センター調査班　副主幹）
	髙橋　和成（秋田県埋蔵文化財センター調査班　文化財主事）
総務担当者	〔平成22年度〕
	久米　　保（秋田県埋蔵文化財センター総務班　主査）
	高村知恵子（秋田県埋蔵文化財センター総務班　主任）
	〔平成23年度〕
	久米　　保（秋田県埋蔵文化財センター総務班　副主幹）
	小松　正典（秋田県埋蔵文化財センター総務班　主査）
調査協力機関	国土交通省東北地方整備局秋田河川国道事務所・仙北市教育委員会

参考文献

秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書324集　2001（平成13）年

秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書342集　2002（平成14）年

秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書380集　2004（平成16）年

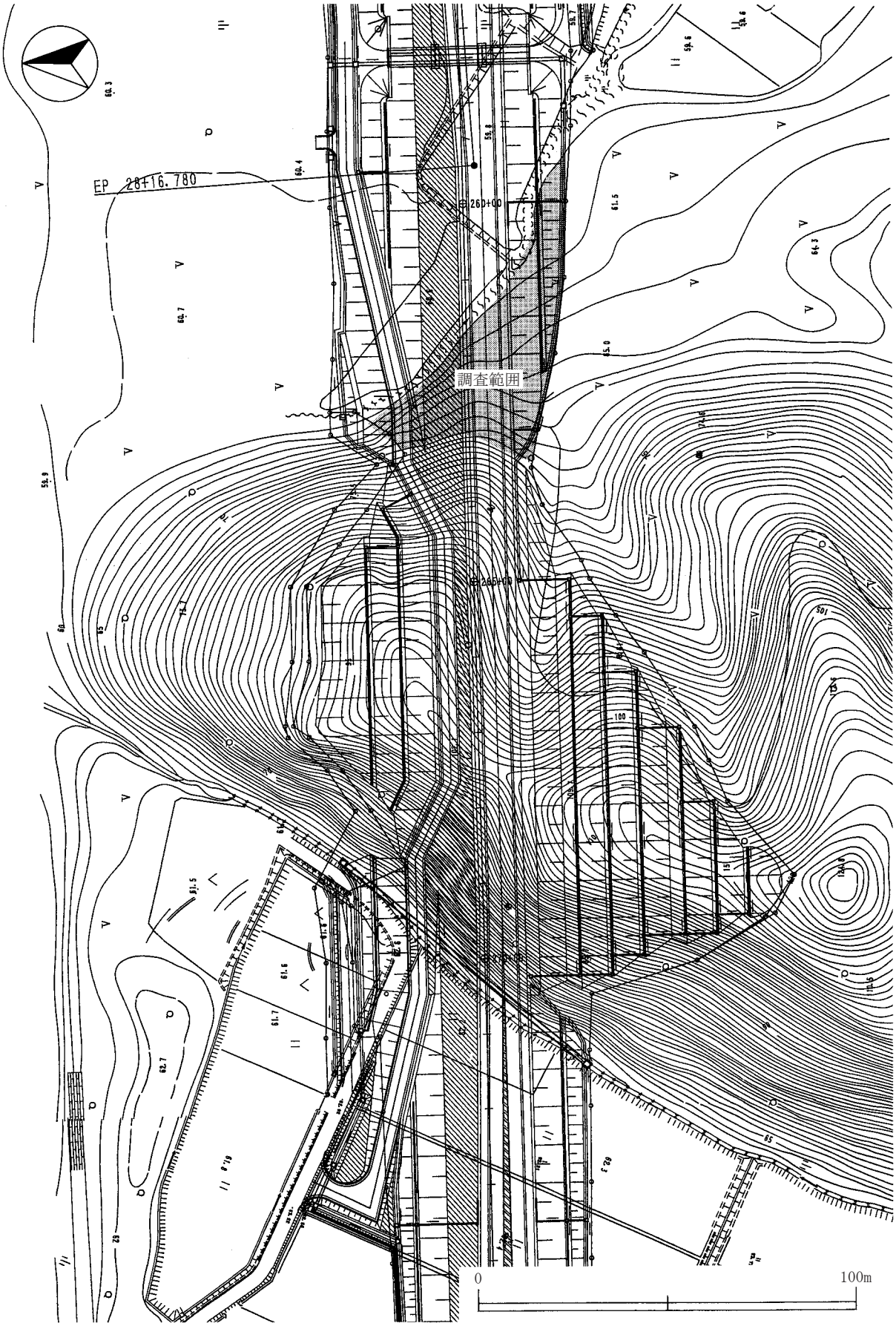
秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書401集　2005（平成17）年

秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書439集　2008（平成20）年

秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書446集　2009（平成21）年

秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書456集　2010（平成22）年

第１図　路線と遺跡



第２図　工事計画と調査範囲図

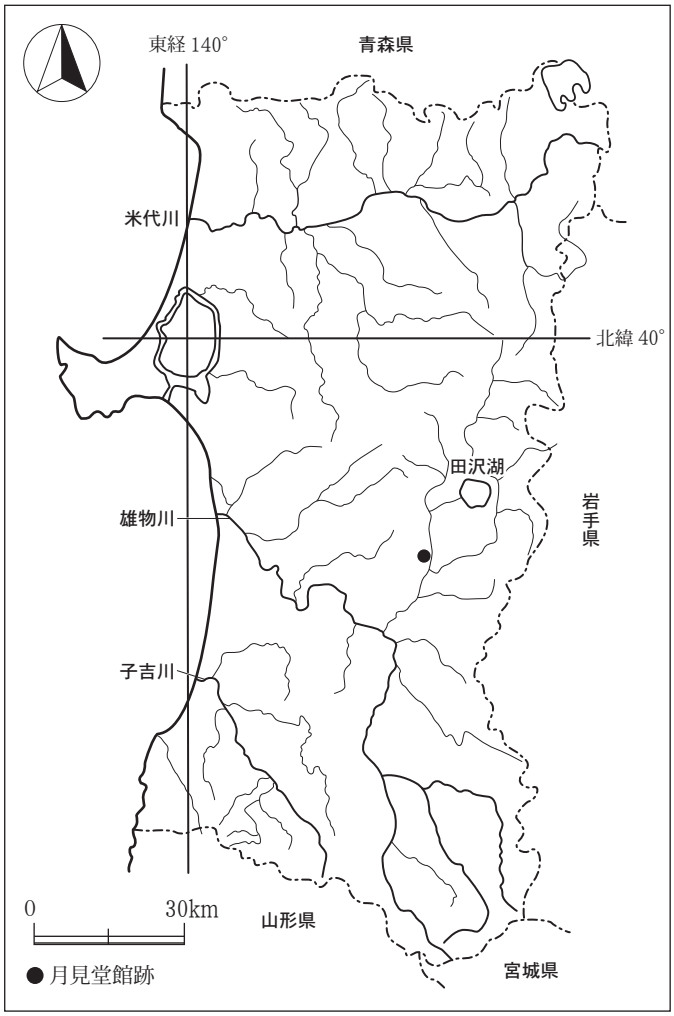
第２章　遺跡の環境

第１節　遺跡の位置と立地

月見堂館跡の所在する仙北市は、秋田県の東部中央に位置する。平成17年（2005）９月、角館町、田沢湖町、西木村の二町一村が合併して現在の仙北市が誕生した。その面積は1,093.63ｋ㎡であり、秋田県内第３位の広さである。北は鹿角市、北西は北秋田市、西は秋田市、南西は大仙市、東は岩手県八幡平市・岩手郡雫石町・和賀郡和賀町と接し、市内をＪＲ田沢湖線・秋田新幹線が北東から南西方向に走り、南北に秋田内陸縦貫鉄道が縦断して仙北市と北秋田市とを結んでいる。さらに、秋田・岩手両県を結ぶ国道46号が東西方向に走り、これと連結して秋田県北部と南部を結ぶ国道105号と国道341号が南北方向に走っており、交通の要衝地となっている。また、角館武家屋敷、抱き返り渓谷、田沢湖、田沢湖高原、乳頭温泉、玉川温泉などの観光資源を有しており、毎年多くの観光客が訪れる東北有数の観光地である。

月見堂館跡は仙北市角館町西部の雲然地区に所在し、ＪＲ田沢湖線角館駅から西へ約3.3㎞の北緯39度35分40秒、東経140度32分05秒に位置している（第３図）。

遺跡のある仙北市角館町は、横手盆地の北縁部に位置している。遺跡周辺の地形は、盆地を囲む山地、盆地内の台地、盆地内を流れる川沿いの低地からなっている（第４図）。盆地を囲む山地は、東側に奥羽山脈に属する朝日岳山地（Ｉａ）、和賀岳・薬師岳山地（Ｉｂ）、風鞍山地（Ｉｃ）、大影山・小影山山地（Ｉｄ）、白岩岳山地（Ｉｅ）、小滝山・扇形山山地（Ｉｆ）、大台山地（Ｉｇ）などの山々が連なっている。北・西側には出羽山地に属する山地として、北側に田沢湖山地（Ｉｈ）、西側に掬森山地（Ｉｉ）、観音岳・赤平山地（Ｉｊ）、諏訪山山地（Ｉｋ）、長野山山地（Ｉｌ）、明光沢岳山地（Ｉｍ）などの山々が連なっている。市街地には角館孤立山塊群（Ｉｎ）がある。盆地内には、これらの山地に源を発して流れる玉川と桧木内川および、その支流である山谷川、院内川、才津川、斉藤川、入見内川などの諸河川によってつくられた



第３図　遺跡位置図

Ⅰ　山　地　：

- Ⅰａ　朝日岳山地
- Ⅰｂ　和賀岳・薬師岳山地
- Ⅰｃ　風鞍山地
- Ⅰｄ　大影山・小影山山地
- Ⅰｅ　白岩岳山地
- Ⅰｆ　小滝山・扇形山山地
- Ⅰｇ　大台山地
- Ⅰｈ　田沢湖山地
- Ⅰｉ　掬森山地
- Ⅰｊ　観音岳・赤平山地
- Ⅰｋ　諏訪山山地
- Ⅰｌ　長野山山地
- Ⅰｍ　明光沢岳山地
- Ⅰｎ　角館孤立山塊群

Ⅱ　台　地　：

- Ⅱａ　外谷地（西中・高野）洪積扇状地

Ⅲ　低　地　：

- Ⅲａ　斉藤川（白岩）扇状地
- Ⅲｂ　小滝川（五百刈田）扇状地
- Ⅲｃ　斉内川扇状地
- Ⅲｄ　川口川扇状地
- Ⅲｅ　東部扇状地前延扇状構造低地
- Ⅲｆ　神代低地
- Ⅲｇ　玉川下流沖積低地
- Ⅲｈ　山谷川河谷低地
- Ⅲｉ　入見内川河谷低地

●　月見堂館跡

第４図　地形区分図

扇状地・低地がある。盆地の東部には北から斉藤川（白岩）扇状地（Ⅲａ）、小滝川（五百刈田）扇状地（Ⅲｂ）、斉内川扇状地（Ⅲｃ）、川口川扇状地（Ⅲｄ）が連なる。盆地の中心部には東部扇状地前延扇状構造低地（Ⅲｅ）、神代低地（Ⅲｆ）、玉川下流沖積低地（Ⅲｇ）があり、西部には山谷川河谷低地（Ⅲｈ）、入見内川河谷低地（Ⅲｉ）がある。また、掬森山地東麓には外谷地（西中高野）洪積扇状地（Ⅱａ）が形成されている。

遺跡は、観音岳・赤平山地と諏訪山山地の山地間を南流する入見内川右岸に立地しており、標高は60～120mである。

第２節　歴史的環境

仙北市では、旧石器時代から近世にかけての遺跡が多数確認されており、これらの遺跡は玉川とこれに合流する諸河川などによって形成された低地と山麓などに分布している。

第５図の月見堂館跡（26）と周辺遺跡位置図の図幅は、南北11.80㎞・東西8.05㎞の仙北市角館町を中心とする地域である。以下には当地域に分布する遺跡について概観する。

なお、図幅内で旧石器時代の遺跡は確認されていないが、仙北市内における旧石器時代の遺跡は、市の中央部に位置する田沢湖の北東湖岸に立地する潟前遺跡が確認されている。この遺跡の発掘調査は、平成８年に秋田県教育委員会が行い、ナイフ形石器・掻器・石刃などを検出した。

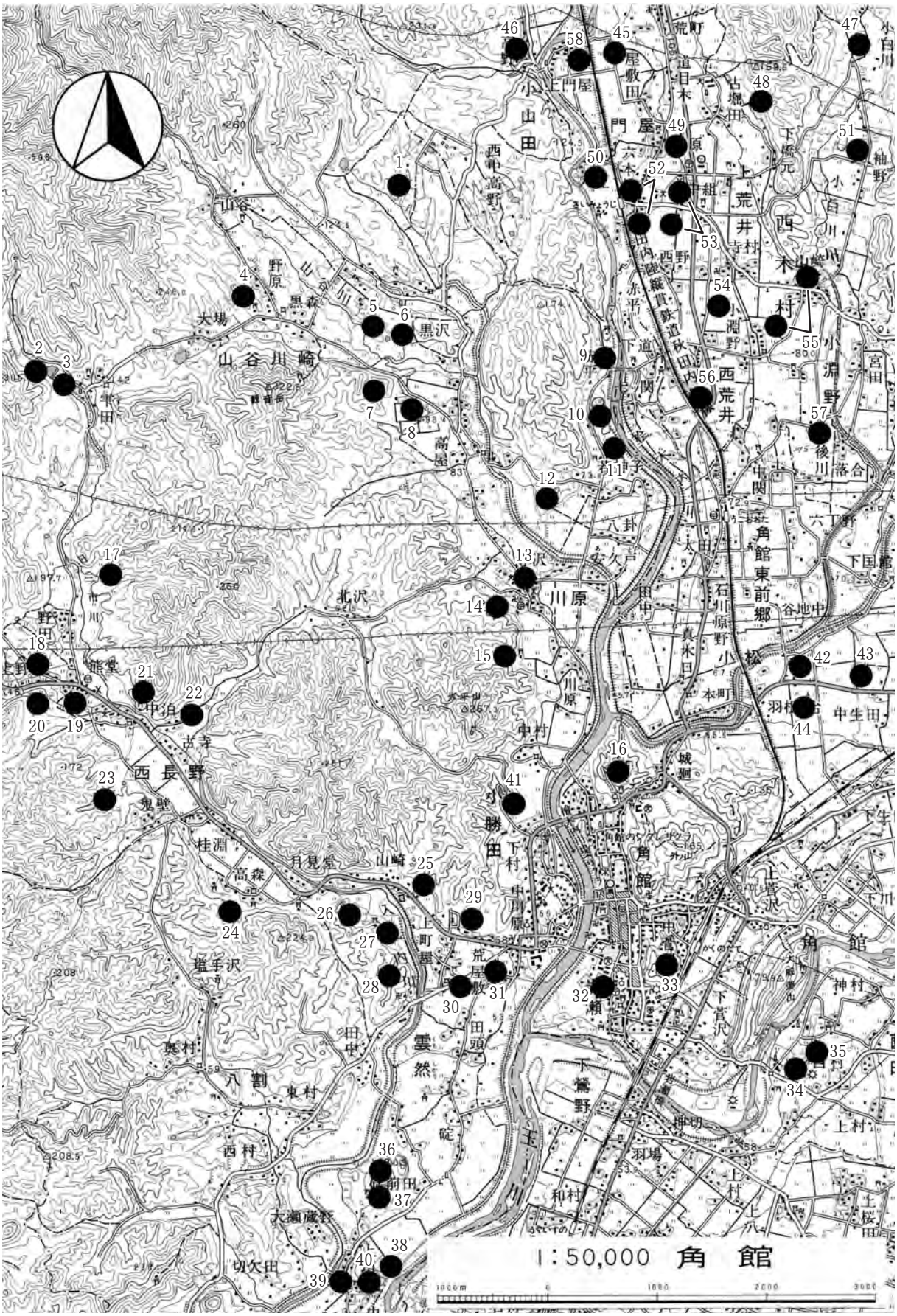
縄文時代の遺跡としては、前期～中期の野田遺跡（17）、中期の西沢一ッ森遺跡（９）・羽黒堂遺跡（13）・熊堂Ⅰ遺跡（18）・荒屋敷遺跡（31）・袖野遺跡（51）、中期～後期の六本杉遺跡（52）・山崎遺跡（55）、後期の入江遺跡（50）、晩期の雫田Ⅰ遺跡（２）・雫田Ⅱ遺跡（３）・下萩の台Ⅱ遺跡（６）・古寺遺跡（22）・山口遺跡（27）・上町屋遺跡（29）・漆原遺跡（49）・田屋遺跡（53）・上門屋遺跡（58）、時期不詳の小黒沢遺跡（１）・下萩の台Ⅰ遺跡（５）・高野遺跡（８）・館下遺跡（11）・寒流遺跡（12）・寺前遺跡（14）・堂ノ沢遺跡（15）・熊堂Ⅱ遺跡（19）・中泊遺跡（20）・鬼壁遺跡（23）・高森遺跡（24）・山崎遺跡（25）・下町屋遺跡（30）・岩瀬遺跡（32）・勝楽遺跡（33）・西村Ⅱ遺跡（35）・上川原遺跡（37）・段添Ⅰ遺跡（38）・段添Ⅱ遺跡（39）・羽根ヶ台Ⅱ遺跡（43）・中村谷地遺跡（44）・小白川遺跡（47）・熊野田遺跡（54）・後川遺跡（57）が確認されている。

弥生時代～古墳時代の遺跡については、この地域ではいまのところ確認されていない。

古代（奈良・平安時代）の遺跡には、土師器や須恵器が採集されている高野遺跡（８）・羽根ヶ台Ⅰ遺跡（42）・古館跡（56）の３遺跡が確認されている。

中世の遺跡は、山谷館跡（４）・片倉館跡（７）・館腰城跡（10）・角館城跡（16）・岩淵館跡（21）・田中館跡（28）・水平城跡（36）・楢館跡（40）・大野関城（45）・門屋城跡（46）・古堀田城跡（48）・古館跡（56）などの城館跡がある。門屋城は、戸沢氏が桧木内に拠点を構えていた時期の山城といわれている。角館町北側の古城山（標高166m）に位置する角館城は、当時の角館を本拠地とした戸沢氏が居城した平山城であったことが知られている。

また、中世のものとして、角館町の園田西村で永和[註]４（1378）年銘の板碑【西村Ⅰ遺跡（34）】と、図幅外であるが田沢湖生保内の下宿で元徳２（1330）年銘の板碑が確認されている。これらの板碑に刻まれた紀年銘（板碑が作られた年）は、戸沢氏が現在の岩手県雫石から秋田の地に移住して、当地



第５図　月見堂館跡（26）と周辺遺跡位置図

第１表　月見堂館跡周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	遺跡地図登録番号	種　別	主な遺構・遺物
1	小黒沢	215－47－１	遺物包含地	縄文土器
2	雫田Ⅰ	215－47－２	遺物包含地	縄文土器(晩期)・石匙・磨製石斧
3	雫田Ⅱ	215－47－３	遺物包含地	縄文土器(晩期)・石匙・磨製石斧
4	山谷館	215－47－４	館跡	
5	下萩の台Ⅰ	215－47－５	配石遺構	土器・組石
6	下萩の台Ⅱ	215－47－６	遺物包含地	縄文土器(晩期)・石斧・石棒・組石群
7	片倉館	215－47－７	館跡	
8	高野	215－47－８	遺物包含地	縄文土器・須恵器・石匙・磨製石斧・打製石斧
9	西沢一ツ森	215－47－９	遺物包含地	縄文土器(中期)・石箆・磨製石斧
10	館腰城	215－47－10	館跡	
11	館下	215－47－11	遺物包含地	石匙・石鏃
12	寒流	215－47－12	遺物包含地	縄文土器・石鏃・石匙・石錘
13	羽黒堂	215－47－13	遺物包含地	縄文土器(中期)・石匙
14	寺前	215－47－14	遺物包含地	縄文土器・土偶・岩版・磨製石斧・石棒・石匙・石剣・独鈷石
15	堂ノ沢	215－47－15	遺物包含地	石匙
16	角館城	215－47－16	館跡	
17	野田	215－47－17	遺物包含地	縄文土器(前期・中期)・石小刀
18	熊堂Ⅰ	215－47－18	遺物包含地	縄文土器(中期)・石匙
19	熊堂Ⅱ	215－47－19	遺物包含地	縄文土器
20	中泊	215－47－20	遺物包含地	縄文土器・石鏃・石棒・石箆
21	岩淵館	215－47－21	館跡	
22	古寺	215－47－22	遺物包含地	縄文土器(晩期)・打製石器・磨製石器
23	鬼壁	215－47－23	遺物包含地	石箆
24	高森	215－47－24	遺物包含地	石匙・石鏃・石斧
25	山崎	215－47－25	遺物包含地	縄文土器・石匙
26	月見堂館	215－47－26	館跡	
27	山口	215－47－27	遺物包含地	縄文土器(晩期)・磨製石器
28	田中館	215－47－28	館跡	
29	上町屋	215－47－29	遺物包含地	縄文土器(晩期)・石棒
30	下町屋	215－47－30	遺物包含地	石棒
31	荒屋敷	215－47－31	遺物包含地	縄文土器(円筒上層式)
32	岩瀬	215－47－32	遺物包含地	縄文土器・磨製石斧・石匙
33	勝楽	215－47－33	遺物包含地	縄文土器
34	西村Ⅰ	215－47－34	板碑	
35	西村Ⅱ	215－47－35	遺物包含地	石器
36	水平城	215－47－40	館跡	
37	上川原	215－47－41	遺物包含地	縄文土器
38	段添Ⅰ	215－47－42	遺物包含地	石器
39	段添Ⅱ	215－47－43	遺物包含地	石箆・打製石斧
40	楢館	215－47－44	館跡	
41	早坂館跡	215－47－48	館跡	
42	羽根ヶ台Ⅰ	215－50－72	遺物包含地	土師器・須恵器・古銭
43	羽根ヶ台Ⅱ	215－50－73	遺物包含地	縄文土器・石鏃・打製石斧
44	中村谷地	215－50－74	遺物包含地	縄文土器
45	大野関城	215－56－48	館跡	土器・石鏃
46	門屋城	215－56－49	館跡	土器・石小刀・石鏃・石槍・石棒・須恵器
47	小白川	215－56－50	遺物包含地	石棒・石鏃・石小刀・石斧
48	古堀田城	215－56－51	館跡	鉄滓・磨製石斧・石鏃・石棒
49	漆原	215－56－52	遺物包含地	土器・石鏃(晩期)
50	入江	215－56－53	遺物包含地	石鏃・縄文土器(後期)
51	袖野	215－56－54	遺物包含地	縄文土器(中期)・石鏃・石槍・石斧・須恵器
52	六本杉	215－56－55	遺物包含地	縄文土器(中期・後期)
53	田屋	215－56－56	遺物包含地	縄文土器(晩期)
54	熊野田	215－56－57	遺物包含地	土器・石棒
55	山崎	215－56－58	遺物包含地	縄文土器(中期・後期)・石鏃・石棒
56	古館	215－56－60	館跡	石鏃・土師器・須恵器
57	後川	215－56－61	遺物包含地	石鏃・石小刀
58	上門屋	215－56－67	遺物包含地	縄文土器(晩期)・石鏃

域に根を下ろしていたことを示しているようである。

近世に至っては、慶長５（1600）年の関ヶ原の戦い後の大名国替えによって、秋田の地に入部した佐竹氏の統治する地域となる。なお、江戸初期の角館は芦名氏が支配して、現在の町並みの原形を作るが、角館は1620年頃に近世城下町的構造をもつ町として整備された。

註：「永和」は、南北朝時代における北朝の年号である。

引用・参考文献

秋田県　『秋田県史』　考古編　1977（昭和52）年

西木村郷土史編纂会　『西木村郷土誌』　1980（昭和55）年

「角川日本地名大辞典」編集委員会 『角川日本地名大辞典　5　秋田県』 角川書店　1980（昭和55）年

秋田県文化財保護協会　『秋田県の中世城館』　1981（昭和56）年

秋田県　『土地分類基本調査　角館・鷽宿』　1989（平成元）年

秋田県教育委員会　『秋田県遺跡地図（仙北地区版）』　2007（平成19）年

秋田県教育委員会　『潟前遺跡（第１次）－県営オートキャンプ場建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ｉ－』　秋田県文化財調査報告書第290集　1999（平成11）年

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

月見堂館跡は前章で述べたように、ＪＲ角館駅から西へ約3.3㎞に位置し、入見内川右岸に立地しており、標高は60～120mである。遺跡の南東側には同じく中世城館の田中館跡が隣接している。入見内川の下流約２㎞には水平城跡、さらに約３㎞には楢館跡という中世城館跡があり、月見堂館跡との関連が窺われる。

月見堂館跡の範囲は、北西－南東700m、北東－南西300mと推定され、工事に伴い調査対象区となった箇所は遺跡の北部である。その標高は西側が70m、中央が61.5m、東側が60mほどであり、西から東に向かって緩やかに傾斜する地形を呈している。遺跡の現況は山林であるが、今回の調査対象地区は工事区にかかったため、伐採された杉などの切り株が残っていた。

調査区の基本層位は、調査区南端に沿って設けた土層観察用トレンチの南壁土層から、以下のとおり分けられた(第６図)。

第Ⅰ層　黒褐色砂質土(10ＹＲ2/2)：しまりと粘性が弱い表土層である。層上位は落葉・落枝などの腐葉を多く含み、黒色(10ＹＲ2/1)を呈する部分がある。層厚は４～ 70cmである。

第Ⅱ層　黒褐色砂質土(10ＹＲ2/3)：しまりと粘性が強い砂質土層である。陶器、縄文土器、石器などの遺物を含んでいる。層厚は１～ 44cmである。

第Ⅲ層　黒褐色砂質土(10ＹＲ3/2)：しまりと粘性が強い砂質土層である。陶器、縄文土器、石器などの遺物を含んでいる。層厚は２～ 63cmである。

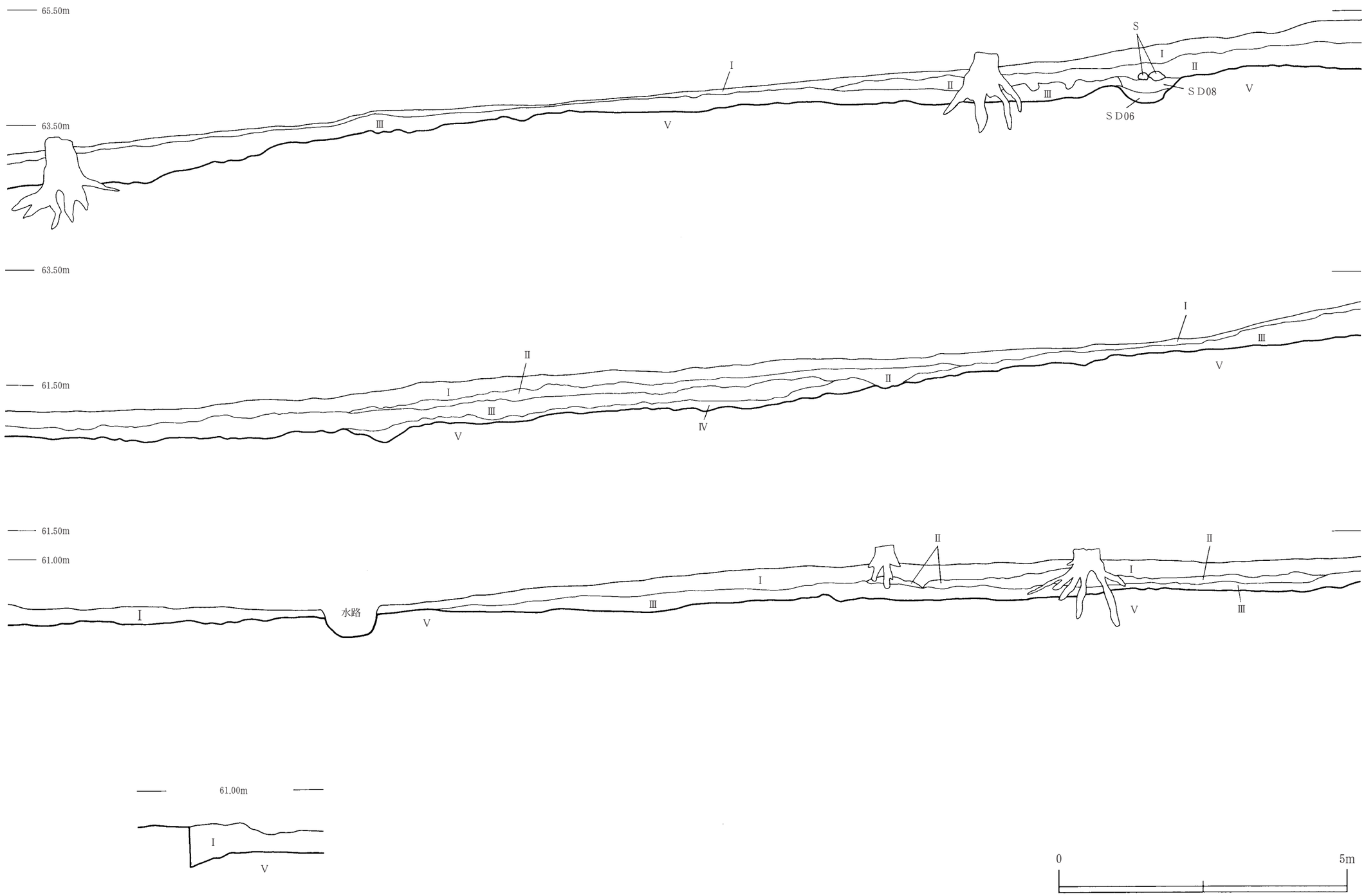
第Ⅳ層　暗褐色砂質土(10ＹＲ3/3)：５層中で最もしまりと粘性が強い砂質土層である。調査区中央付近のみで認められた層である。層厚は１～ 26cmである。

第Ⅴ層　明黄褐色砂質土(10ＹＲ6/6)：しまりが強く、多少粘性を帯びた地山である。

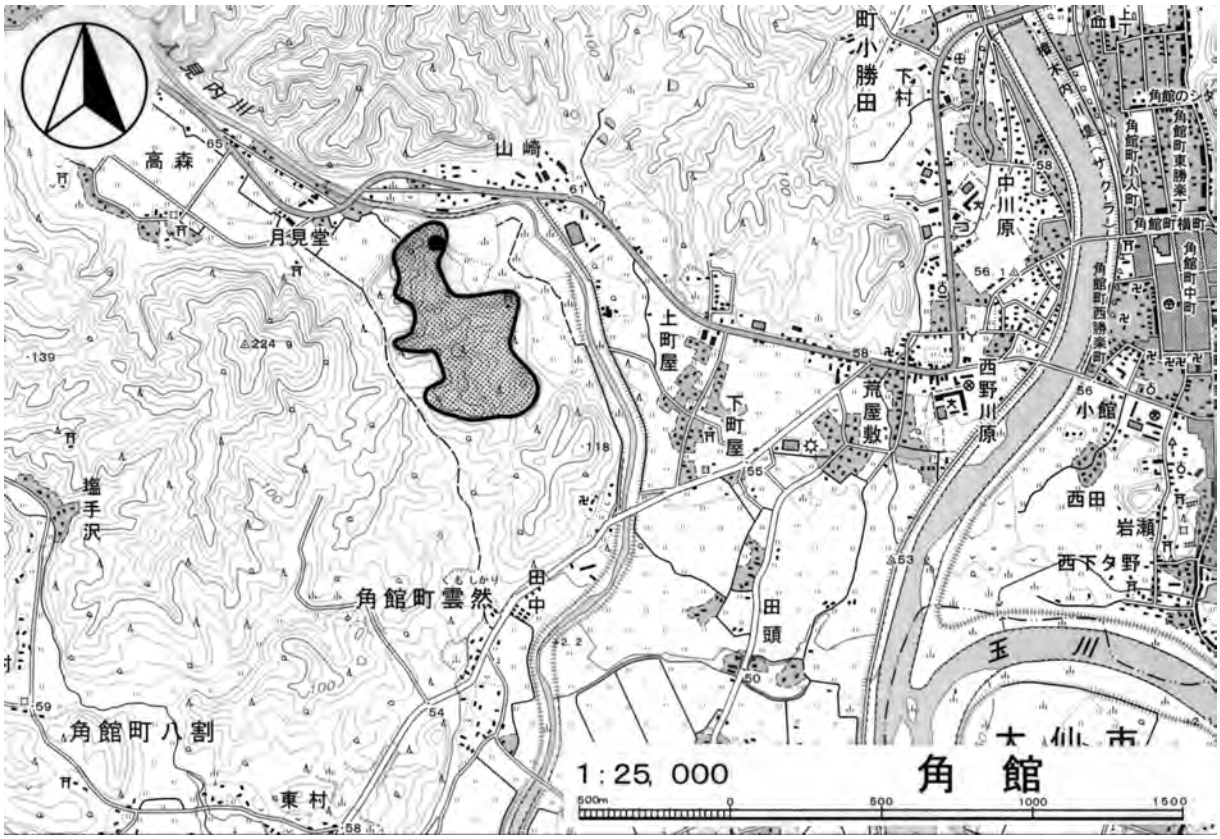
第２節　調査の方法

確認調査の結果に基づいて第Ⅰ層の表土除去をバックホーで行った。ただし、調査区東部の杉根が密集する箇所と、調査区北西部の狭小でバックホーが入れない箇所の表土除去は人力で行った。遺構確認精査と第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ層の粗掘りはジョレン・移植ベラ・スコップなどを用いて全て人力で行った。また、発掘排土はベルトコンベヤーと一輪車を併用して排土置き場に運搬した。排土置き場は調査区外北側の旧水田を利用した。

調査にあたっては、計画的な調査と遺構･遺物の検出地点を把握するため、グリッド法を採用した。設定方法は、調査区内に任意の１点(Ｘ＝-45230.817、Ｙ＝-25343.309)を選定し、これをグリッド原点ＭＡ50として、この原点から世界測地系国家座標第Ｘ系座標北を求め、このラインを南北基線、これに直交するラインを東西基線とした。この東西南北に沿って４ｍ×４ｍのグリッドを設定し、東西方向には東から西へ４ｍごとに「ＬＪ・ＬＫ・・・・ＬＴ・ＭＡ・ＭＢ・・・・ＭＧ・ＭＨ」とい



第６図　調査区の基本層位図



第７図　月見堂館跡範囲図と周辺地形図

う２文字のアルファベットを、南北方向には南から北へ４ｍごとに「44・45・・・・49・50・51・・・59・60」という２桁の数字を与え、このアルファベットと算用数字の組み合わせからなる記号を各グリッドの名称とした。なお、グリッド杭は４ｍ間隔の東西基線と南北基線の交点すべてに打設し、前記のグリッド名称を南東隅の杭に記入した。

検出した遺構には、発見順に略記号および通し番号を付し精査を行った。また、出土した遺物には、遺跡名・出土位置または遺構名・出土層位・出土年月日を記録し、取り上げた。

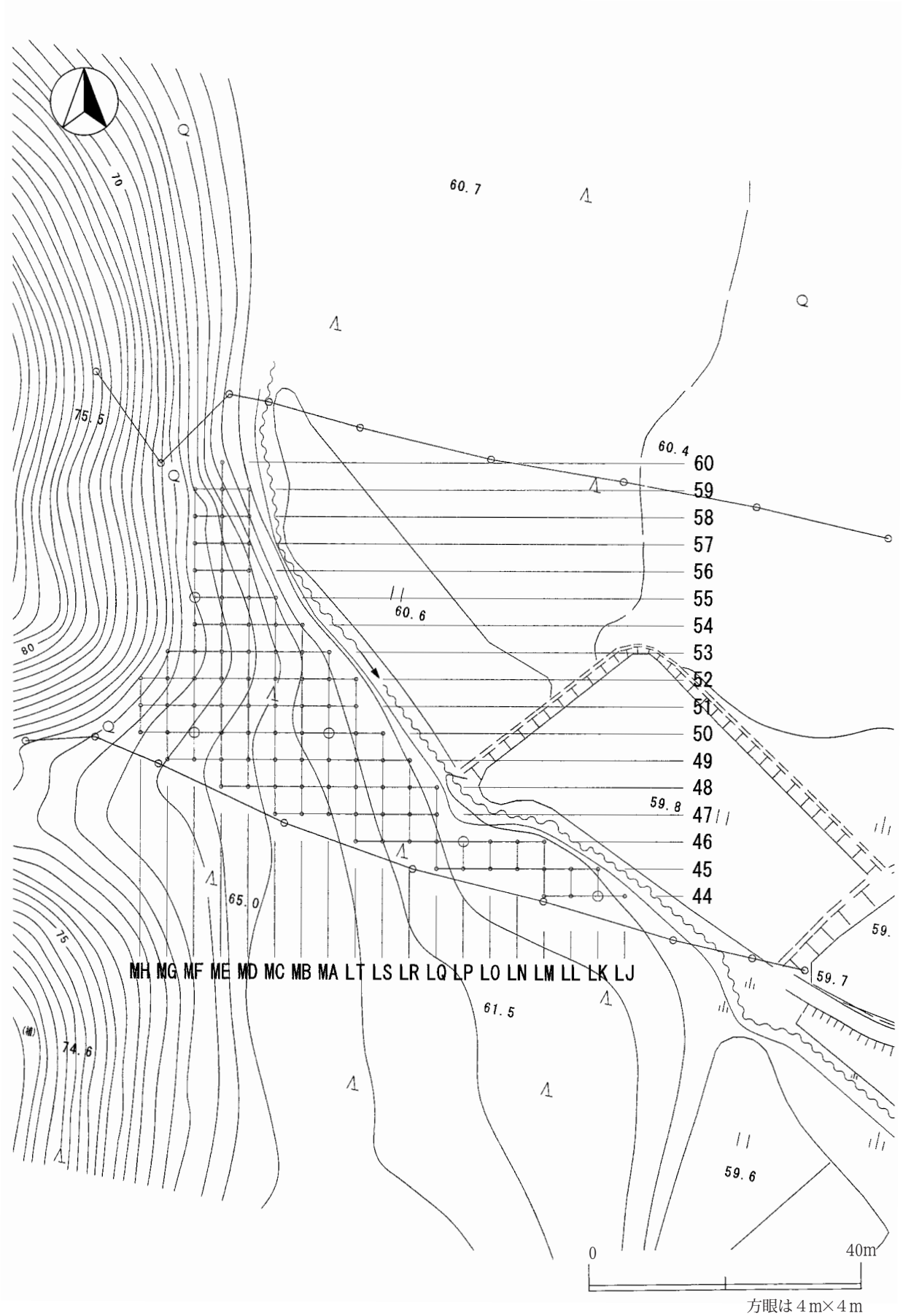
調査の記録は、平面図・断面図の作成および写真撮影によった。平面図・断面図の縮尺は1/20を原則としたが、遺構細部の図面を必要とする際には1/10で作図した。写真撮影には35㎜モノクロ、リバーサル、カラーフィルムおよびデジタルカメラを使用した。

第３節　調査の経過

月見堂館跡の発掘調査は、平成22年５月24日から７月14日まで実施した。以下に各週ごとの調査経過を記述する。

【第１週】５月24日～５月28日

24日、事務手続き、環境整備、および発掘機材準備などを行った。埋蔵文化財センター櫻田隆所長が作業員へ調査開始のあいさつのため来跡。25日から掘り下げ開始。調査区東側から西側へ向かって粗掘りを行った。



方眼は４m×４m

第８図　グリット設定図

【第２週】５月31日～６月４日

包含層の掘り下げと遺構確認作業を行う。調査区西側から中央にかけて土坑、かまど状遺構、配石遺構および柱穴様ピットを検出した。１日これまで降雨により搬入できなかったベルトコンベアーを重機で搬入し配置した。

【第３週】６月７日～６月11日

包含層の掘り下げと遺構確認作業を行う。調査区中央から東側にかけて溝状遺構、柱穴様ピットを検出した。また、遺跡基本土層となる調査区南壁の精査を行う。

【第４週】６月14日～６月18日

調査区東側の斜面裾部の堆積土が厚く、引き続き掘り下げを行う。同時に遺構確認および遺構精査作業を行った。また、遺跡基本土層となる調査区南壁の写真撮影および断面実測を行った。

【第５週】６月21日～６月25日

調査区東側の斜面裾部の掘り下げを続ける。ＭＦ40・50グリッドを沢頭にして調査区を北東に向かって沢が走ることが判明した。この埋没沢周辺からは竪穴建物跡、溝跡、柱穴様ピットを検出し、精査を行った。

【第６週】６月28日～７月２日

斜面裾部の掘り下げと遺構精査・実測作業を行う。悪天候が続き、予定していた航空写真撮影は来週へ延期となった。

【第７週】７月５日～７月９日

航空写真撮影に向けて準備を整え、６日に撮影を行う。撮影後は遺構精査・実測作業に傾注する。

【第８週】７月12日～７月14日

残っていた遺構の実測作業を行う。また、撤収に向けて機材の洗浄・整理を並行して行った。最終日14日は現場引き渡し、事務手続きなど滞りなく行い、撤収した。

第４節　整理作業の方法と経過

整理作業は、発掘調査終了後に秋田県埋蔵文化財センターで行った。出土遺物は、洗浄・注記・分類・接合を行った後、実測と採拓を行った。検出遺構については、調査で記録作図した実測図をもとに製図用の第２原図と遺構の図版を作成した。次に遺構の第２原図と遺物の実測図などをトレースして挿図を作成した。また、遺物の写真撮影を行って遺物の図版を作成した。この後、割付と編集を行って報告書を刊行した。

なお、放射性炭素年代測定および樹種同定するため、遺構内などからサンプリングした炭化物は、株式会社パレオ・ラボに委託した。

第４章　調査の記録

本調査で検出された遺構は、縄文時代の土坑２基、配石遺構１基、中世の竪穴建物跡１棟、掘立柱建物跡１棟、かまど状遺構２基、溝跡５条、柱穴様ピット92基である(第９図～第11図)。これらの遺構は調査区全体にかけて検出された。このうち中世のかまど状遺構２基、溝跡１条は第Ⅲ層上面で検出されたが、それ以外の遺構は第Ⅴ層上面で検出した。

遺物は主にⅡ・Ⅲ層から出土し、縄文土器・石器、中世陶器などが出土した。遺構内出土遺物は、ＳＫ02から出土した凹石１点のみである。

第１節　縄文時代の遺構と遺物

１　検出遺構と遺物

（１）土坑

ＳＫ02（第12図、図版４－１）

《位置・確認》ＬＬ45グリッドに位置する。第Ⅴ層上面で確認した。

《重複》なし

《平面形・規模》平面形は北西壁がやや張り出す不整楕円形を呈する。長軸(北－南)0.92m×短軸(西－東)0.78m、確認面からの深さは0.35mである。

《壁・底面》壁の傾きは緩やかで、底面はほぼ平坦である。

《堆積土》３層に分けられた。堆積状況は自然堆積である。

《出土遺物》底面の中央部付近から凹石が出土した（第11図１）。楕円形の礫を素材として片面に３個の凹みがつくられている。大きさは長さ13.3cm、幅7.8cm、厚さ3.5cmで石材は安山岩である。

ＳＫ97（第12図）

《位置・確認》ＬＳ48グリッドに位置する。第Ⅴ層上面で確認した。

《重複》ＳＤ98と重複するが本遺構の方が古い。

《平面形・規模》長軸(北西－南東)0.96m×短軸(北東－南西)0.85mで、確認面からの深さは0.44mで西壁が張り出す不整楕円形である。

《壁・底面》壁の傾きは緩やかで、底面はほぼ平坦である。

《堆積土》ＳＤ98と重複しており、残存している部分は１層である。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。

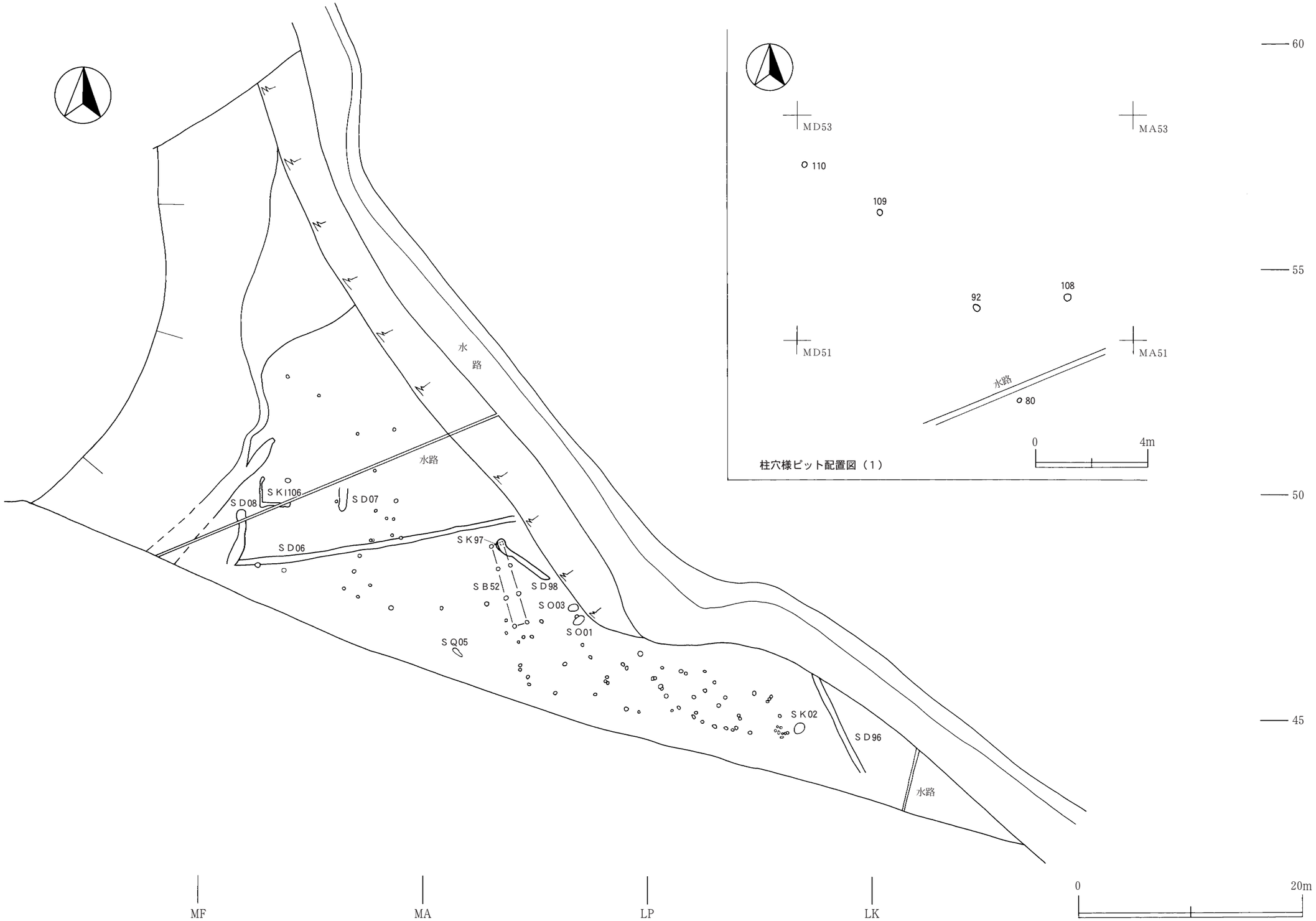
（２）配石遺構

ＳＱ05（第12図、図版４－２）

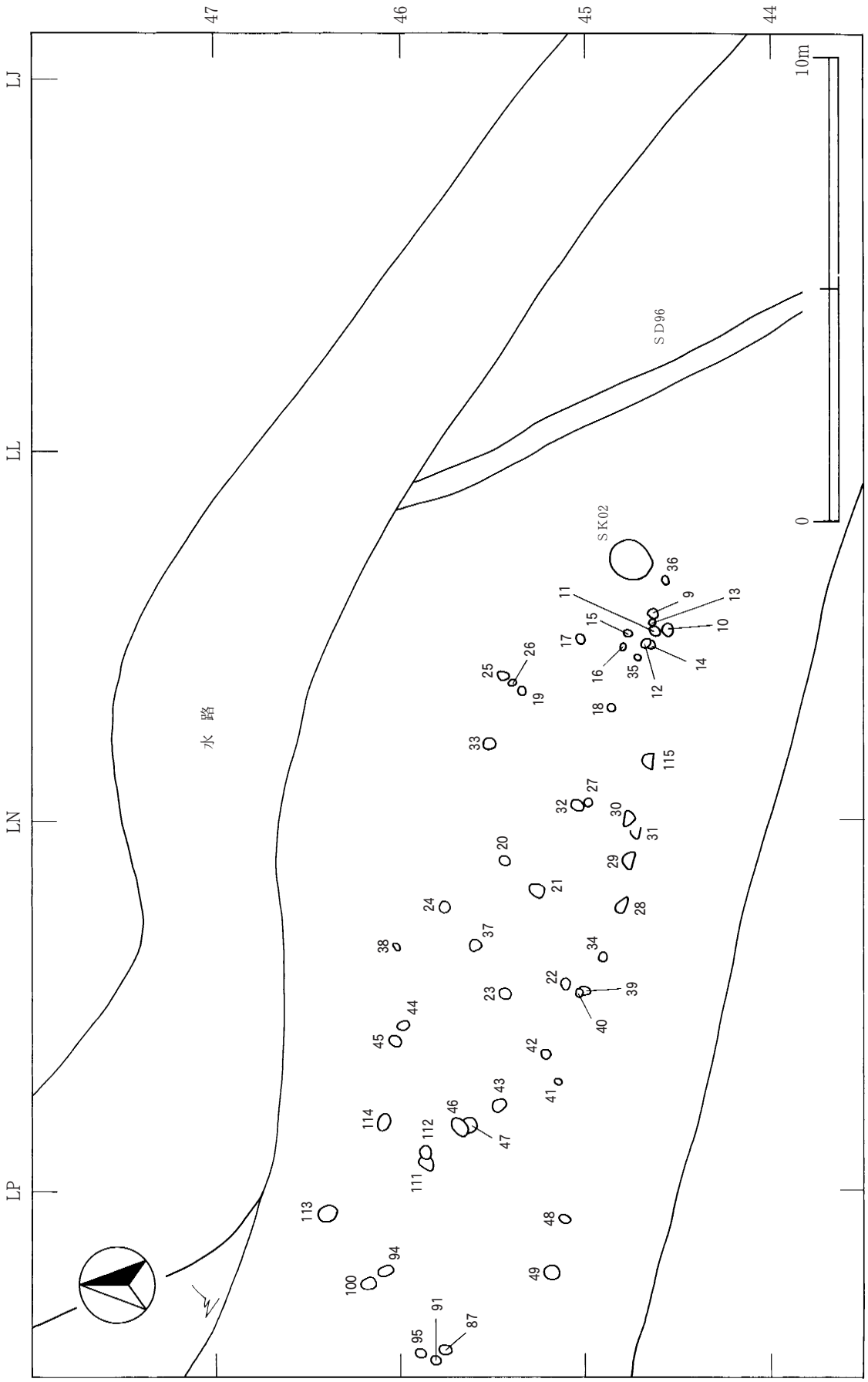
《位置・確認》ＬＴ46グリッドに位置する。第Ⅴ層上面で確認した。

《重複》なし

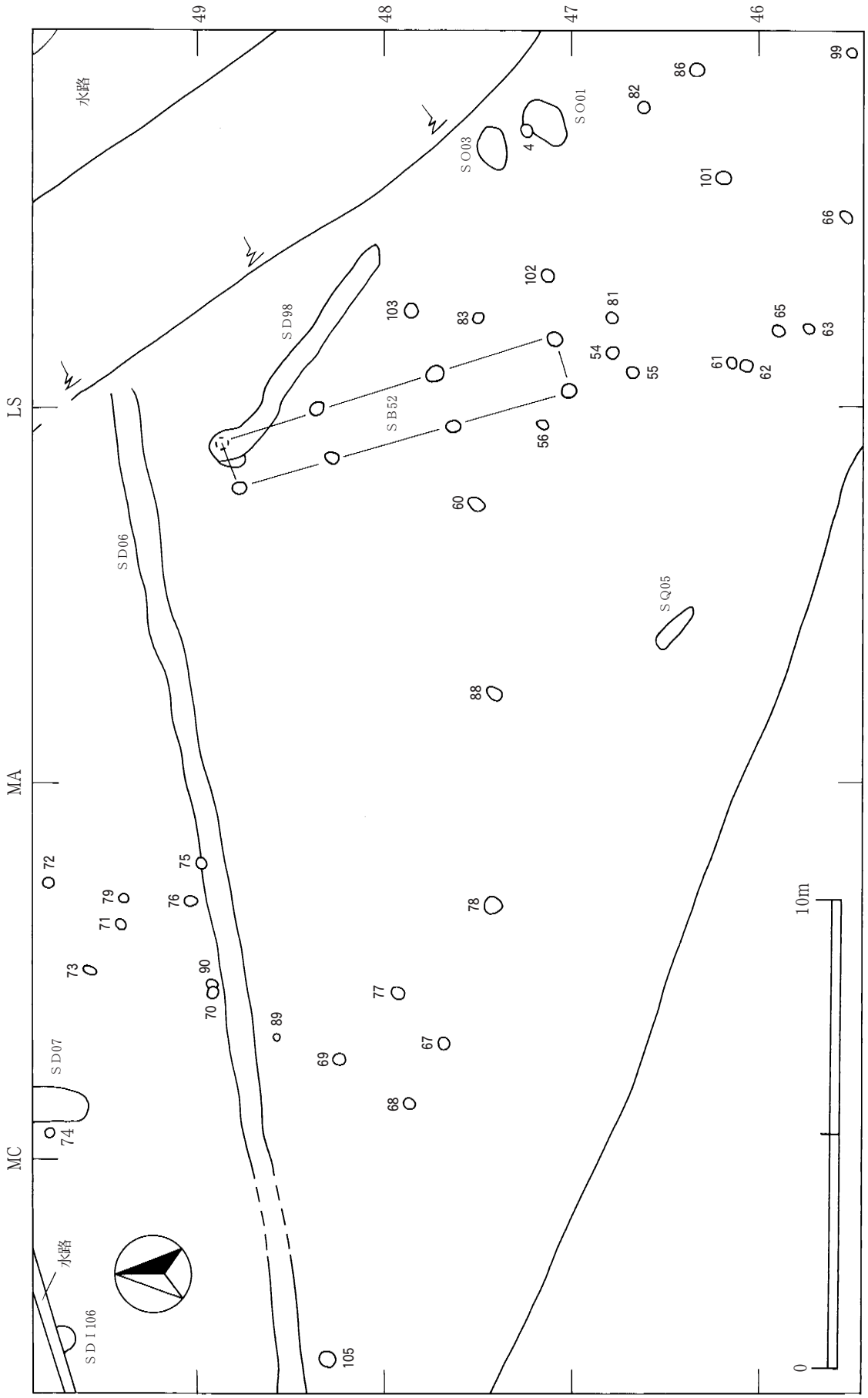
《平面形・規模》平面形が長軸（北東－南西）1.10m×短軸（北西－南東）0.32mの楕円形を呈し、



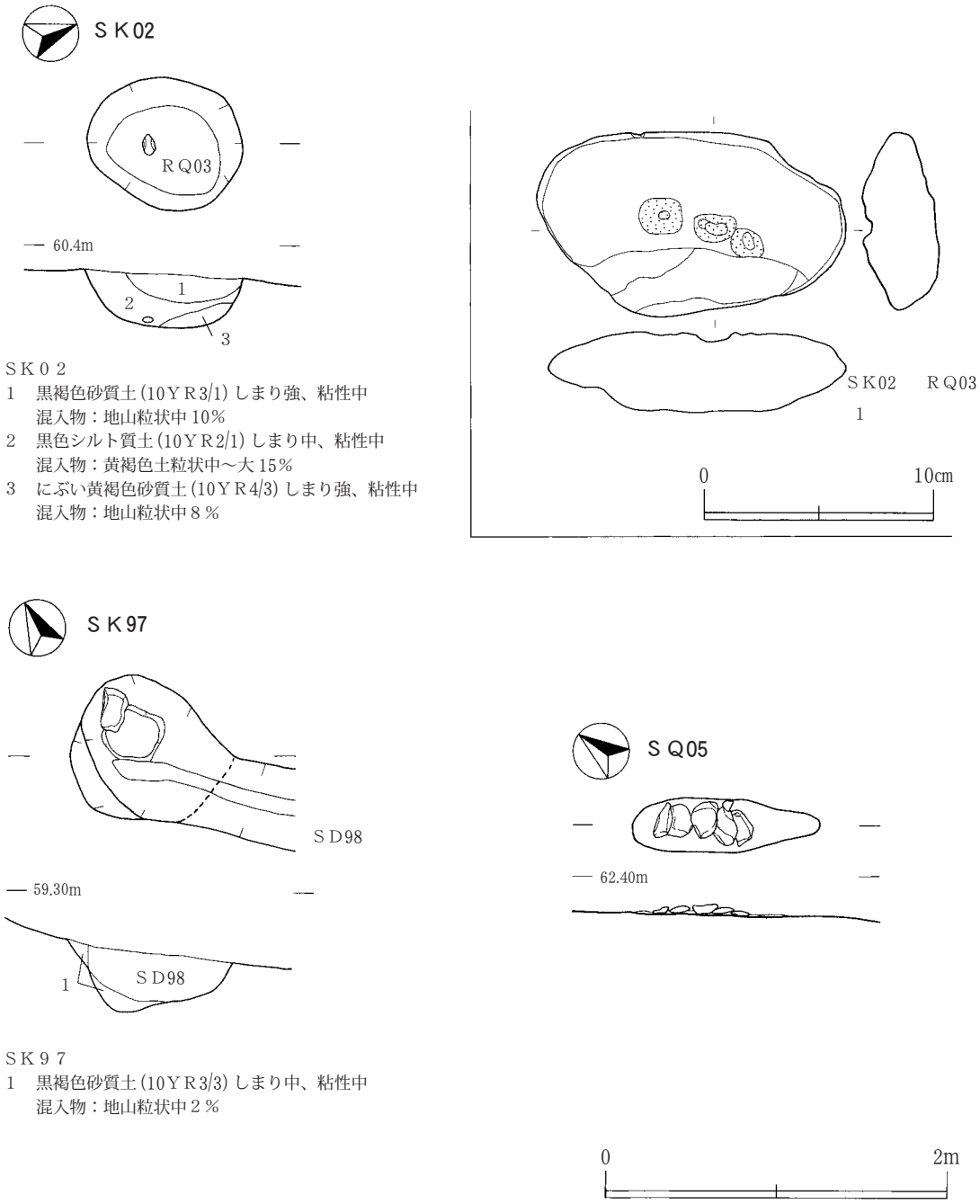
第９図　遺構配置図、柱穴様ピット配置図（１）



第 10 図　柱穴様ピット配置図（２）



第 11 図　柱穴様ピット配置図（３）



第 12 図　ＳＫ 02・97・ＳＱ 05・遺構内出土遺物

確認面から深さ２㎝ほどの落ち込みに、長さ20～24㎝、幅８～16㎝、厚さ２～５㎝の扁平な礫５個を重ねて一列に配しており、その長さは57㎝である。これらの礫に加工や被熱を受けた痕跡は認められなかった。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。

２　遺構外出土遺物

（１）縄文土器（第13図、図版９）

遺構外からは縄文時代前期・後期の土器片が30点ほど出土した。なお、全体の形状を把握できる接合資料はなかったが、接合復元した土器資料を８点掲載した（第13図２～９）。

２～４は粗製深鉢形土器の破片である。非常に薄手であるが繊維を含む縄文時代前期のものである。２はＭＢ53グリッドの第Ⅱ層から出土した。口縁部片であり、単節ＬＲ縄文が施される。３・４はＭＡ51グリッドの第Ⅲ層から出土し、これらは同一個体の口縁部から胴部の破片である。単節ＲＬ縄文が施されている。５はＭＤ50グリッドの第Ⅲ層、６はＭＤ51グリッドの第Ⅲ層から出土した。これらは同一壺形土器の口縁部・胴部片である。沈線によって区画される口縁部帯は無文であり、沈線以下には撚糸文（Ｒ）が施される。７はＬＲ48グリッドの第Ⅲ層から出土した。胴部片であり、単節ＬＲ縄文が施される。５～７の時期は縄文時代後期に属し、５・６は後期前葉である。８はＭＤ50グリッドの第Ⅲ層、９はＭＥ51グリッドの第Ⅲ層から出土した底部片である。いずれも底面に網代状の圧痕が認められる。

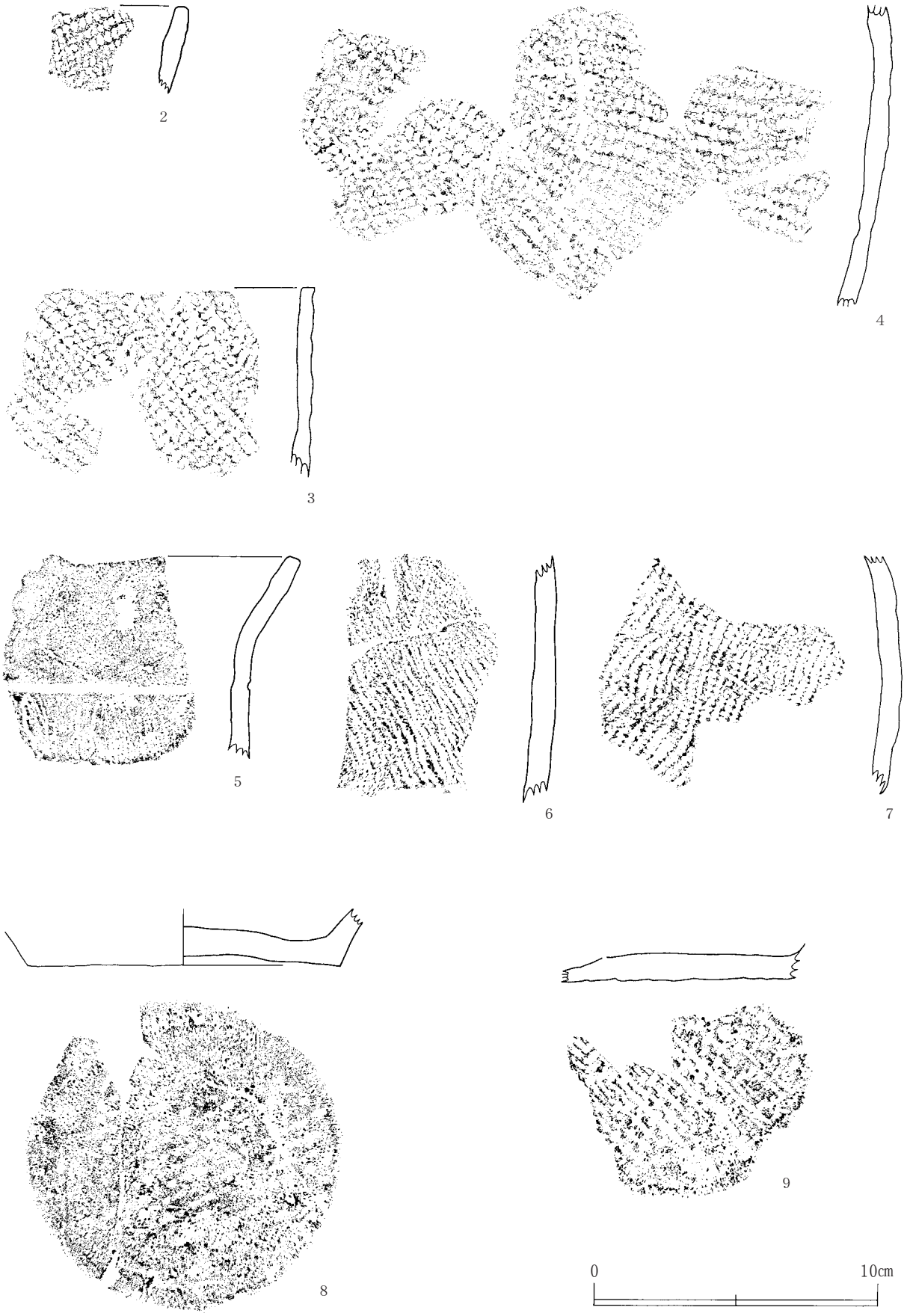
（２）石器（第14図、図版10）

遺構外出土の石器は、石箆・磨製石斧・凹石の３点である（第14図10～13）。

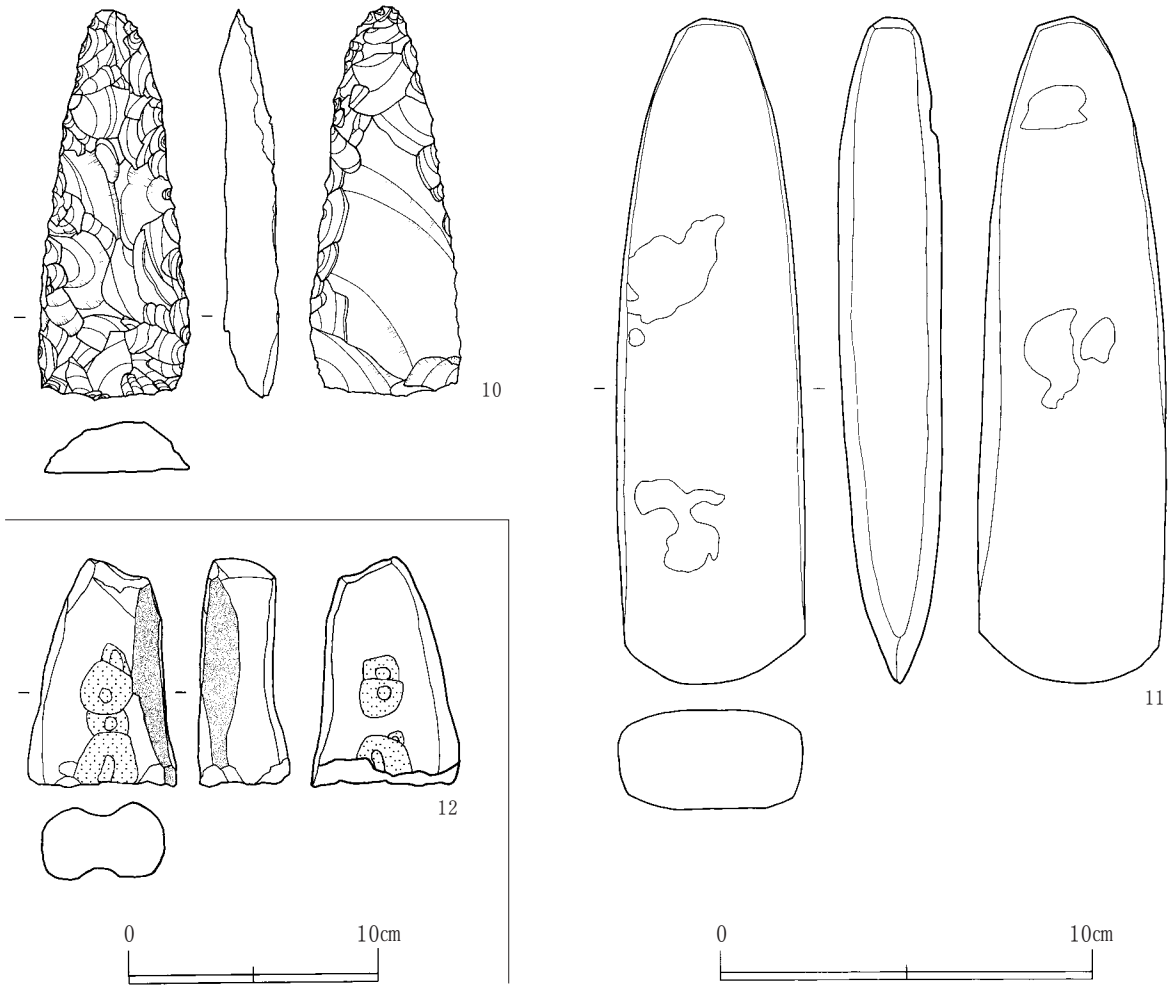
10は石箆でＭＣ48グリッドの第Ⅱ層から出土した。基部が狭く下方が広がる箆形を呈し、刃部付近に最大幅を持つ。大きさは長さ10.5㎝、幅4.1㎝、厚さ1.6㎝であり、石材は頁岩である。刃部は片刃で急角度をなし、円刃である。両面に二次加工を施しているが、片面には素材の剥離面を残している。

11は磨製石斧でＬＱ46グリッドの第Ⅲ層から出土した。大きさは長さ17.9㎝、幅5.2㎝、厚さ2.8㎝であり、石材は安山岩である。完形で刃部は両刃の円刃をなしている。断面は隅丸長方形を呈し、定角式磨製石斧に属する。

12は凹石でＬＳ49グリッドの第Ⅲ層から出土した。楕円形の礫を素材として両面に４個の重複する凹みがつくられている。大きさは残存長9.1㎝、幅5.3㎝、厚さ3.0㎝であり、石材は安山岩である。片側面には磨られて平滑になった面が認められる。



第 13 図　遺構外出土遺物（１）



第 14 図　遺構外出土遺物（２）

第２節　中世の遺構と遺物

１　検出遺構

（１）竪穴建物跡

ＳＫＩ106（第14図、図版５－１）

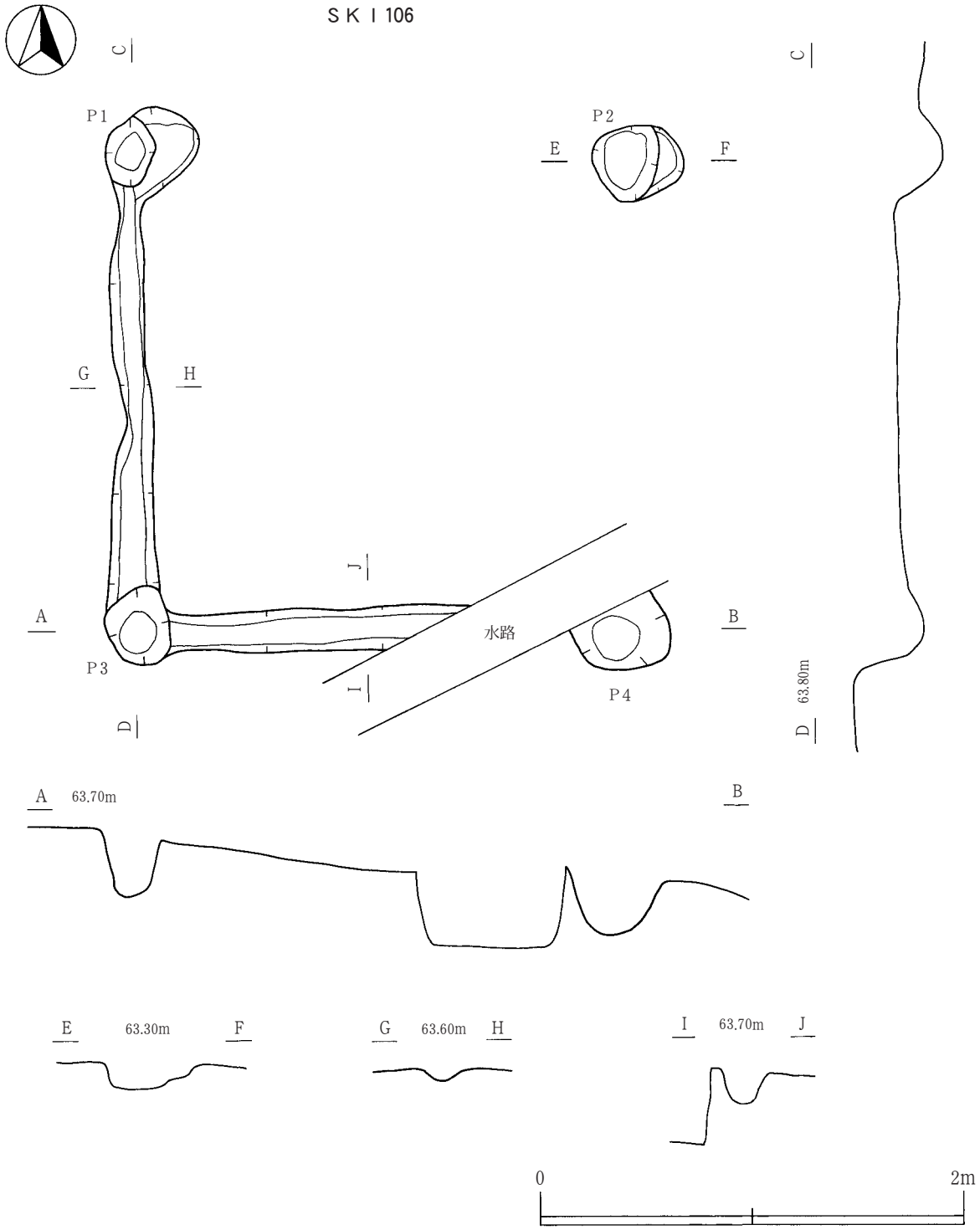
《位置・確認》ＭＣ49、ＭＤ49・50グリッドに位置する。第Ｖ層上面で確認した。

《重複》なし

《平面形・規模》平面形は検出された柱穴と壁溝から方形を呈するものと推察され、その規模は長軸（南－北）2.64m×短軸（東－西）2.66mと推測される。

《壁・底面》壁と底面は確認できなかった。いずれも木の根による撹乱や水路工事の際に削平されたものと思われる。

《柱穴》本竪穴建物跡の北西隅（Ｐ１）・北東隅（Ｐ２）・南西隅（Ｐ３）・南東隅（Ｐ４）で各１基の計４基検出した。これらの平面形は楕円形を呈し、長軸0.37～0.47m、短軸0.34～0.37m、確認面からの深さは0.12～0.31mである。堆積土は黒褐色砂質土（10ＹＲ2/3・3/2）や暗褐色砂質土（10ＹＲ3/3）でしまりの弱い単一層であり、柱痕跡は認められなかった。個々の柱穴については第２表のとおりである。



第 15 図　ＳＫＩ 106

第２表　ＳＫＩ 106 柱穴観察表

柱穴番号	検出グリッド	平面形	大きさ			底面標高(m)	備　考
			長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)		
Ｐ１	ＭＤ50	楕円形	0.46	0.36	0.14	63.19	
Ｐ２	ＭＣ50	楕円形	0.44	0.37	0.12	63.08	
Ｐ３	ＭＤ49	楕円形	0.37	0.34	0.31	63.29	
Ｐ４	ＭＣ・ＭＤ49	楕円形	0.47	0.36	0.30	63.10	

《壁溝》西側と南側の西半分で確認した。幅0.11 ～ 0.2m、確認面からの深さは0.08 ～ 0.2mである。
《出土遺物》遺物は出土しなかった。

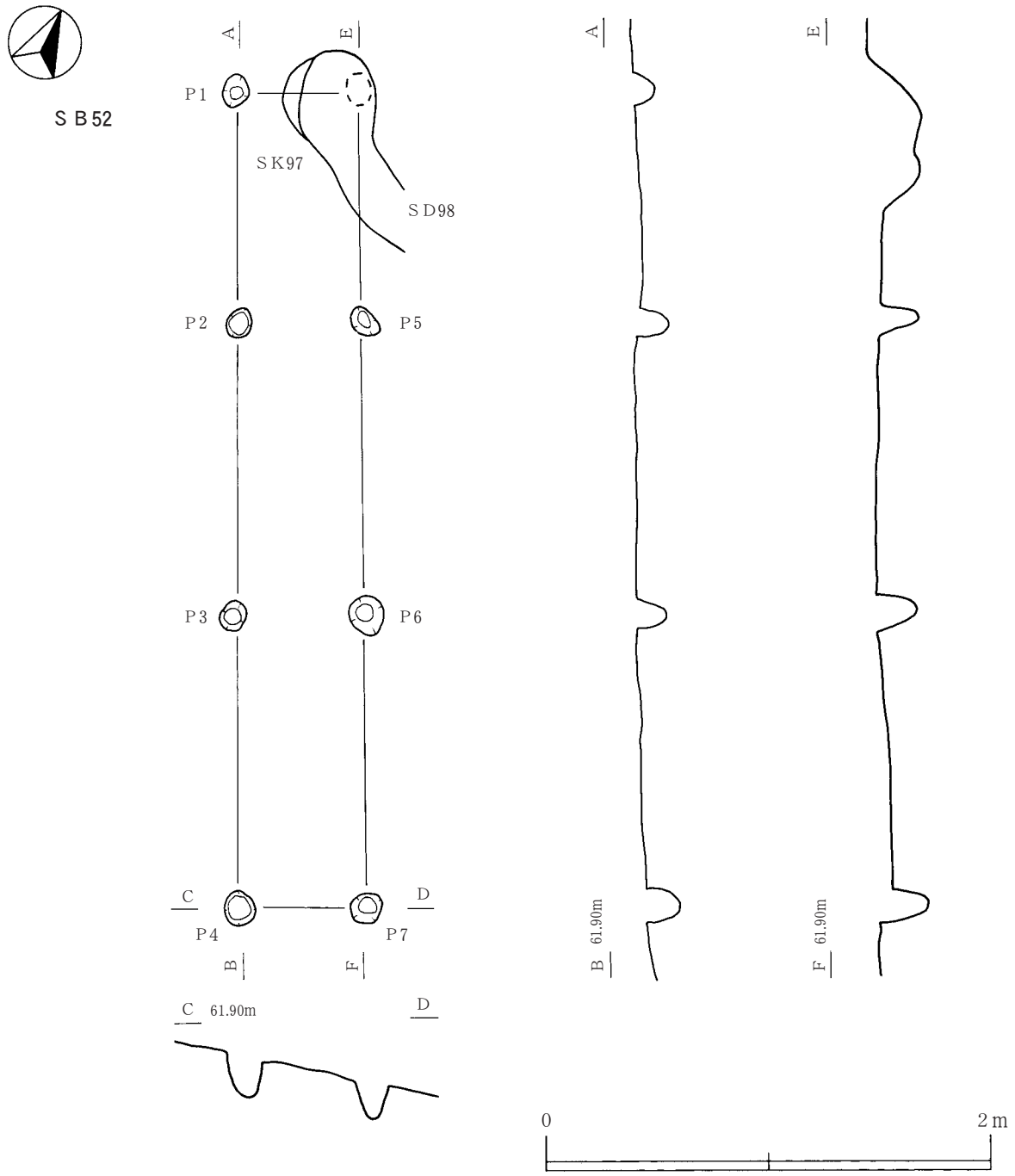
（２）掘立柱建物跡

ＳＢ52（第16図、図版５－２）
《位置・確認》ＬＳ47・48、ＬＲ47・48グリッドに位置する。第Ⅴ層上面で、南北方向にほぼ等間隔に並列する柱穴を確認した。本来は北東側にもう１基柱穴があったと思われるが、ＳＤ96に北西端が位置しており、その構築の際に削平されたものと推察される。
《重複》ＳＫ97とＳＤ98と重複する。本遺構はＳＤ98より古いが、ＳＫ97との新旧関係は不明である。
《規模》桁行３間×梁行１間で、桁行総長（Ｐ１－Ｐ４）7.36m、梁行総長（Ｐ４－Ｐ７）1.18mである。主軸方位はＮ－18°－Ｗである。
《柱穴》７基検出された。これらの平面形は楕円形を呈し、長軸0.26 ～ 0.36m、短軸0.2 ～ 0.32m、確認面からの深さは0.18 ～ 0.44mである。堆積土は黒褐色砂質土（10ＹＲ2/3）および暗褐色砂質土の単一層であり、柱痕跡は認められなかった。個々の柱穴については第２表のとおりである。
《出土遺物》遺物は出土しなかった。

（３）かまど状遺構

ＳＯ01（第17図、図版６－１）
《位置・確認》ＬＱ47グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で確認した。
《重複》ＳＫＰ04と重複する。その新旧は本遺構の方が古い。
《平面形・規模》平面形は不整な楕円形である。長軸(北東－南西)1.14m×短軸(北西－南東)0.84mで、確認面からの深さは0.24mである。
《壁・底面》底面および壁面の一部には被熱による硬化がみられるが、天井・壁の大部分が崩落している。底面はほぼ平坦であるが、南東の斜面に向かって落ち込んでいる。
《堆積土》４層に分けられる。底面には炭化物層が２～６㎝の厚さで堆積し、その上に天井部の崩落土が堆積している。
《出土遺物》遺物は出土しなかった。

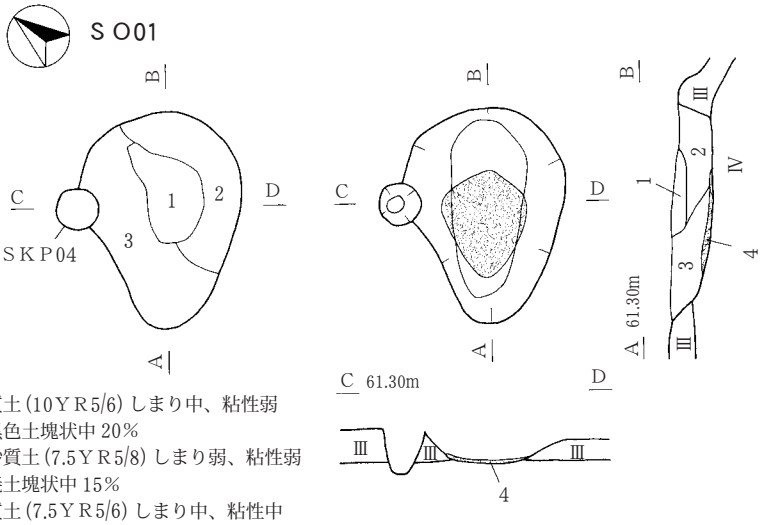
ＳＯ03（第17図、図版６－２）
《位置・確認》ＬＱ47グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で確認した。
《重複》なし
《平面形・規模》平面形は不整な楕円形である。長軸(北東－南西)1.22m×短軸(北西－南東)0.79mで、確認面からの深さは0.23mである。
《壁・底面》底面および壁面の一部には被熱による硬化がみられるが、天井・壁の大部分が崩落している。底面はほぼ平坦であるが、南東側にある斜面に向かって落ち込んでいる。
《堆積土》４層に分けられる。底面には炭化物層が２～６㎝の厚さで堆積し、その上に天井部の崩落土が堆積している。
《出土遺物》遺物は出土しなかった。



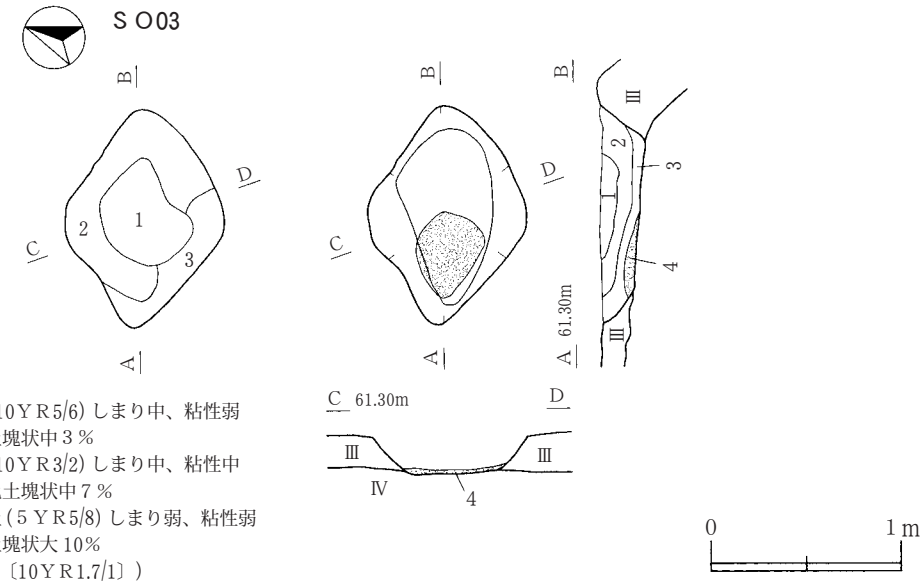
第 16 図　ＳＢ 52

第３表　ＳＢ 52 柱穴観察表

柱穴番号	検　出グリッド	平面形	大きさ			底面標高(m)	備　考
			長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)		
Ｐ１	ＬＳ48	楕円形	0.28	0.22	0.18	61.44	
Ｐ２	ＬＳ48	楕円形	0.32	0.22	0.28	61.34	
Ｐ３	ＬＳ47	楕円形	0.26	0.22	0.28	61.32	
Ｐ４	ＬＲ46・47	楕円形	0.32	0.28	0.30	61.28	
Ｐ５	ＬＲ・ＬＳ48	楕円形	0.28	0.20	0.36	61.08	
Ｐ６	ＬＲ47	楕円形	0.36	0.32	0.36	61.13	
Ｐ７	ＬＲ47	楕円形	0.32	0.28	0.44	61.00	



ＳＯ０１
1　黄褐色砂質土(10ＹＲ5/6) しまり中、粘性弱
　　混入物：黒色土塊状中 20％
2　明赤褐色砂質土(7.5ＹＲ5/8) しまり弱、粘性弱
　　混入物：焼土塊状中 15％
3　明褐色砂質土(7.5ＹＲ5/6) しまり中、粘性中
　　混入物：黒色土粒状大５％
4　炭化物層(黒色〔10ＹＲ1.7/1〕)



ＳＯ０３
1　黄褐色砂質土(10ＹＲ5/6) しまり中、粘性弱
　　混入物：黒色土塊状中３％
2　黒褐色砂質土(10ＹＲ3/2) しまり中、粘性中
　　混入物：黄褐色土塊状中７％
3　明赤褐色砂質土(５ＹＲ5/8) しまり弱、粘性弱
　　混入物：黒色土塊状大 10％
4　炭化物層(黒色〔10ＹＲ1.7/1〕)

第 17 図　ＳＯ 01・03

（４）溝跡

ＳＤ06（第18図）

《位置・確認》ＬＲ49、ＬＳ49、ＬＴ48・49、ＭＡ48・49、ＭＢ48、ＭＣ48、ＭＤ48グリッドに位置する。第Ⅴ層上面で確認した。

《重複》ＳＤ08およびＳＫＰ75と重複するが、いずれも本遺構の方が古い。

《規模》確認できる範囲で長さ24.56m、幅0.4 ～ 0.6m、確認面からの深さ0.32mで南西から北東に向かって延びている。

《壁・底面》壁の傾きは緩やかで、底面はほぼ平坦である。

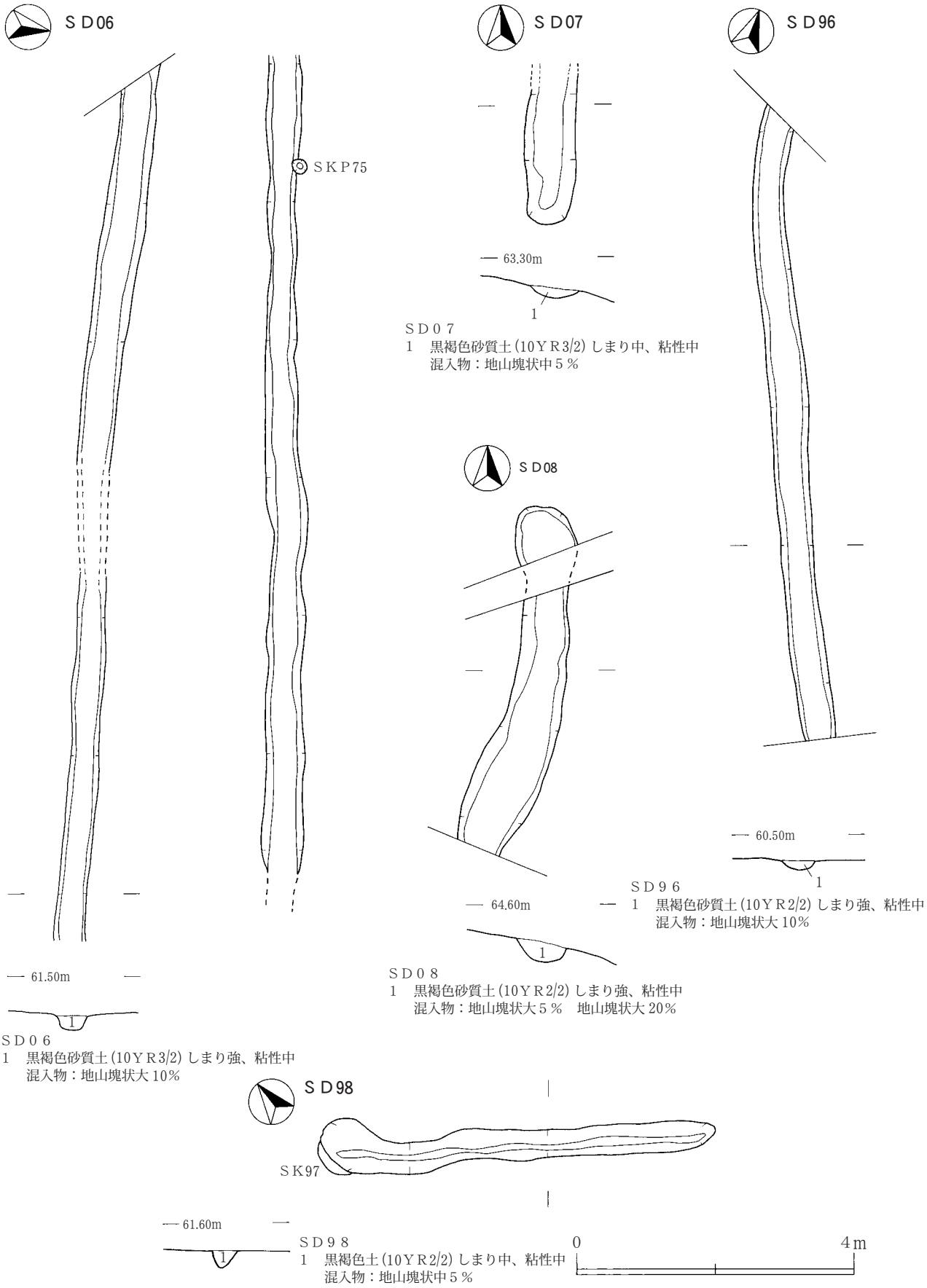
《堆積土》１層である。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。

ＳＤ07（第18図）
《位置・確認》ＭＢ49・50グリッドに位置する。第Ⅴ層上面で確認した。
《重複》なし
《規模》確認できる範囲で長さ2.12m、幅0.74m、深さ0.2mで南から北に向かって延びている。
《壁・底面》壁の傾きは緩やかで、底面はほぼ平坦である。
《堆積土》１層である。
《出土遺物》遺物は出土しなかった。
ＳＤ08（第18図）
《位置・確認》ＭＥ48・49、ＭＤ48・49グリッドに位置する。第Ⅴ層上面で確認した。
《重複》ＳＤ06と重複し、本遺構の方が新しい。
《規模》確認できる範囲で長さ5.04m、幅0.64～1.00m、確認面からの深さ0.2mで南西から北に向かって延びている。
《壁・底面》壁の傾きは緩やかで、底面はほぼ平坦である。
《堆積土》１層である。
《出土遺物》遺物は出土しなかった。
ＳＤ96（第16図、図版７－１）
《位置・確認》ＬＬ45、ＬＫ43・44・45グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で確認した。
《重複》なし
《規模》確認できる範囲で長さ9.12m、幅0.44～0.56m、確認面からの深さ0.16mで南東から北西に向かって延びている。
《壁・底面》壁の傾きは急で、底面はほぼ平坦である。
《堆積土》１層である。
《出土遺物》遺物は出土しなかった。
ＳＤ98（第18図、図版７－２）
《位置・確認》ＬＳ48、ＬＲ48グリッドに位置する。第Ⅴ層上面で確認した。
《重複》ＳＢ52とＳＫ97と重複し、本遺構の方が新しい。
《規模》確認できる範囲で長さ5.68m、幅0.40～0.76m、確認面からの深さ0.24mで南東から北西に向かって延びている。
《壁・底面》壁の傾きは緩やかで、底面はほぼ平坦である。
《堆積土》１層である。
《出土遺物》遺物は出土しなかった。

（５）柱穴様ピット（第９・10・11図）

柱穴様ピットは調査区全体で92基を検出した。平面形は円形と楕円形を呈し、堆積土は黒褐色砂質土（10ＹＲ2/3･3/2）や暗褐色砂質土（10ＹＲ3/3）の単一層であり、しまりの弱い層が多い。また、規則的な配列は認められず、柱痕跡も認められなかった。遺物は出土しなかった。個々の柱穴様ピットについては第４・５・６表にまとめた。



第18図　ＳＤ06・07・08・96・98

第４表　柱穴様ピット観察表（１）

ＳＫＰ番号	検出グリッド	平面形	大きさ			底面標高(m)	備考
			長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)		
4	ＬＱ47	(円形)	0.20	(0.17)	0.26	60.85	
9	ＬＬ44	楕円形	0.25	0.20	0.18	60.01	
10	ＬＬ44	円形	0.27	0.26	0.20	60.00	
11	ＬＬ44	楕円形	0.25	0.20	0.19	60.00	
12	ＬＭ44	楕円形	0.25	0.20	0.21	60.00	
13	ＬＬ44	楕円形	0.18	(0.14)	0.14	60.05	
14	ＬＭ44	(楕円形)	0.18	(0.08)	0.09	60.10	
15	ＬＬ・ＬＭ44	楕円形	0.20	0.17	0.15	60.17	
16	ＬＭ44	楕円形	0.20	0.18	0.10	60.2	
17	ＬＭ44・45	円形	0.25	0.23	0.39	59.9	
18	ＬＭ44	楕円形	0.20	0.15	0.07	60.29	
19	ＬＭ45	楕円形	0.26	0.19	0.12	59.97	
20	ＬＮ45	楕円形	0.23	0.20	0.12	60.27	
21	ＬＮ45	楕円形	0.36	0.31	0.29	60.24	
22	ＬＮ45	楕円形	0.23	0.22	0.32	60.22	
23	ＬＮ45	楕円形	0.26	0.22	0.14	60.38	
24	ＬＮ45	楕円形	0.27	0.23	0.16	60.27	
25	ＬＭ45	楕円形	0.24	0.21	0.13	60.04	
26	ＬＭ45	楕円形	0.23	0.20	0.30	59.87	
27	ＬＭ44・45	楕円形	0.28	0.20	0.07	60.34	
28	ＬＮ44	(楕円形)	0.42	(0.21)	0.25	60.20	
29	ＬＮ44	(楕円形)	(0.27)	0.34	0.18	60.28	
30	ＬＭ・ＬＮ44	(楕円形)	(0.24)	0.23	0.11	60.35	
31	ＬＮ44	(楕円形)	(0.20)	0,26	0.50	60.13	
32	ＬＭ・ＬＮ45	楕円形	0.25	0.20	0.18	60.22	
33	ＬＭ45	円形	0.27	0.26	0.09	59.98	
34	ＬＮ44	(楕円形)	(0.13)	0.18	0.06	60.46	
35	ＬＭ44	楕円形	0.18	0.15	0.10	60.12	
36	ＬＬ44	楕円形	0.18	0.14	0.12	60.06	
37	ＬＮ45	円形	0.25	0.24	0.09	60.38	
38	ＬＮ46	楕円形	0.17	0.13	0.15	60.30	

※（　）内の平面形と数値は推定である。

第５表　柱穴様ピット観察表（２）

ＳＫＰ番　号	検　　出グリッド	平面形	大きさ			底面標高(m)	備　考
			長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)		
39	ＬＮ 44・45	(楕円形)	(0.20)	0.22	0.13	60.41	
40	ＬＮ 45	楕円形	0.17	0.16	0.12	60.42	
41	ＬＯ 45	円形	0.18	0.17	0.23	60.31	
42	ＬＯ 45	楕円形	0.25	0.21	0.15	60.39	
43	ＬＯ 45	楕円形	0.34	0.28	0.20	60.31	
44	ＬＯ 45・46	楕円形	0.27	0.23	0.10	60.33	
45	ＬＯ 46	楕円形	0.30	0.25	0.22	60.18	
46	ＬＯ 45	楕円形	0.39	0.30	0.32	60.13	
47	ＬＯ 45	(円形)	0.33	(0.15)	0.32	60.13	
48	ＬＰ 45	楕円形	0.26	0.23	0.06	60.38	
49	ＬＰ 45	円形	0.32	0.32	0.20	60.34	
54	ＬＲ 46	円形	0.28	0.27	0.36	61.15	
55	ＬＲ 46	楕円形	0.27	0.23	0.40	61.16	
56	ＬＳ 47	円形	0.25	0.24	0.14	61.56	
60	ＬＳ 47	楕円形	0.37	0.28	0.10	61.76	
61	ＬＲ 46	楕円形	0.25	0.20	0.30	61.31	
62	ＬＲ 46	楕円形	0.30	0.27	0.36	61.30	
63	ＬＲ 45	楕円形	0.21	0.18	0.20	61.13	
65	ＬＲ 45	楕円形	0.29	0.24	0.13	61.19	
66	ＬＱ・ＬＲ 45	円形	0.25	0.24	0.13	60.93	
67	ＭＢ 47	楕円形	0.25	0.23	0.20	63.20	
68	ＭＢ 47	楕円形	0.24	0.20	0.56	62.99	
69	ＭＢ 48	楕円形	0.25	0.20	0.35	62.96	
70	ＭＢ 48	楕円形	0.27	0.24	0.25	62.79	
71	ＭＡ 49	円形	0.24	0.23	0.28	62.55	
72	ＭＡ 49	楕円形	0.28	0.25	0.20	62.35	
73	ＭＢ 49	楕円形	0.26	0.21	0.33	62.46	
74	ＭＢ 49	楕円形	0.20	0.15	0.10	62.87	
75	ＭＡ 48・49	楕円形	0.24	0.20	0.13	62.57	
76	ＭＡ 48・49	楕円形	0.26	0.24	0.17	62.69	
77	ＭＢ 47	円形	0.30	0.30	0.59	62.65	

※（　）内の平面形と数値は推定である。

第６表　柱穴様ピット観察表（３）

ＳＫＰ番号	検出グリッド	平面形	大きさ			底面標高(m)	備考
			長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)		
78	ＭＡ 47	円形	0.38	0.37	0.21	62.95	
79	ＭＡ 49	円形	0.20	0.20	0.15	62.59	
80	ＭＢ 50	円形	0.16	0.15	0.28	62.27	
81	ＬＲ 46	円形	0.24	0.23	0.32	61.16	
82	ＬＱ 46	円形	0.25	0.25	0.21	60.73	
83	ＬＲ 47	円形	0.23	0.22	0.08	61.29	
86	ＬＱ 46	楕円形	0.32	0.28	0.37	60.56	
87	ＬＰ 45	楕円形	0.28	0.23	0.29	60.43	
88	ＬＴ 47	楕円形	0.38	0.22	0.65	61.73	
89	ＭＢ 48	楕円形	0.21	0.17	0.15	63.01	
90	ＭＢ 48	（円形）	0.23	（0.15）	0.16	62.88	
91	ＬＰ 45	円形	0.23	0.22	0.15	60.55	
92	ＭＢ 51	楕円形	0.26	0.20	0.59	61.71	
94	ＬＰ 46	楕円形	0.32	0.24	0.21	60.43	
95	ＬＰ 45	楕円形	0.26	0.22	0.20	60.50	
99	ＬＱ 45	楕円形	0.22	0.18	0.19	60.61	
100	ＬＰ 46	楕円形	0.32	0.23	0.22	60.43	
101	ＬＱ 46	円形	0.30	0.29	0.16	60.87	
102	ＬＲ 47	楕円形	0.27	0.24	0.21	61.07	
103	ＬＲ 47	円形	0.30	0.28	0.24	61.11	
105	ＭＤ 48	隅丸方形	0.37	0.36	0.31	63.54	
107	ＭＤ 48	楕円形	0.35	0.24	0.27	63.79	
108	ＭＡ 51	楕円形	0.23	0.20	0.37	61.75	
109	ＭＣ 52	楕円形	0.23	0.18	0.19	62.10	
110	ＭＣ 52	楕円形	0.22	0.20	0.12	62.21	
111	ＬＯ 45	円形	0.32	（0.21）	0.27	60.25	
112	ＬＯ 45	円形	0.32	0.31	0.32	60.18	
113	ＬＰ 46	楕円形	0.40	0.35	0.24	60.30	
114	ＬＯ 46	楕円形	0.35	0.23	0.51	59.99	
115	ＬＭ 44	（楕円形）	（0.23）	0.35	0.43	60.08	

※（　）内の平面形と数値は推定である。

２　遺構外出土遺物

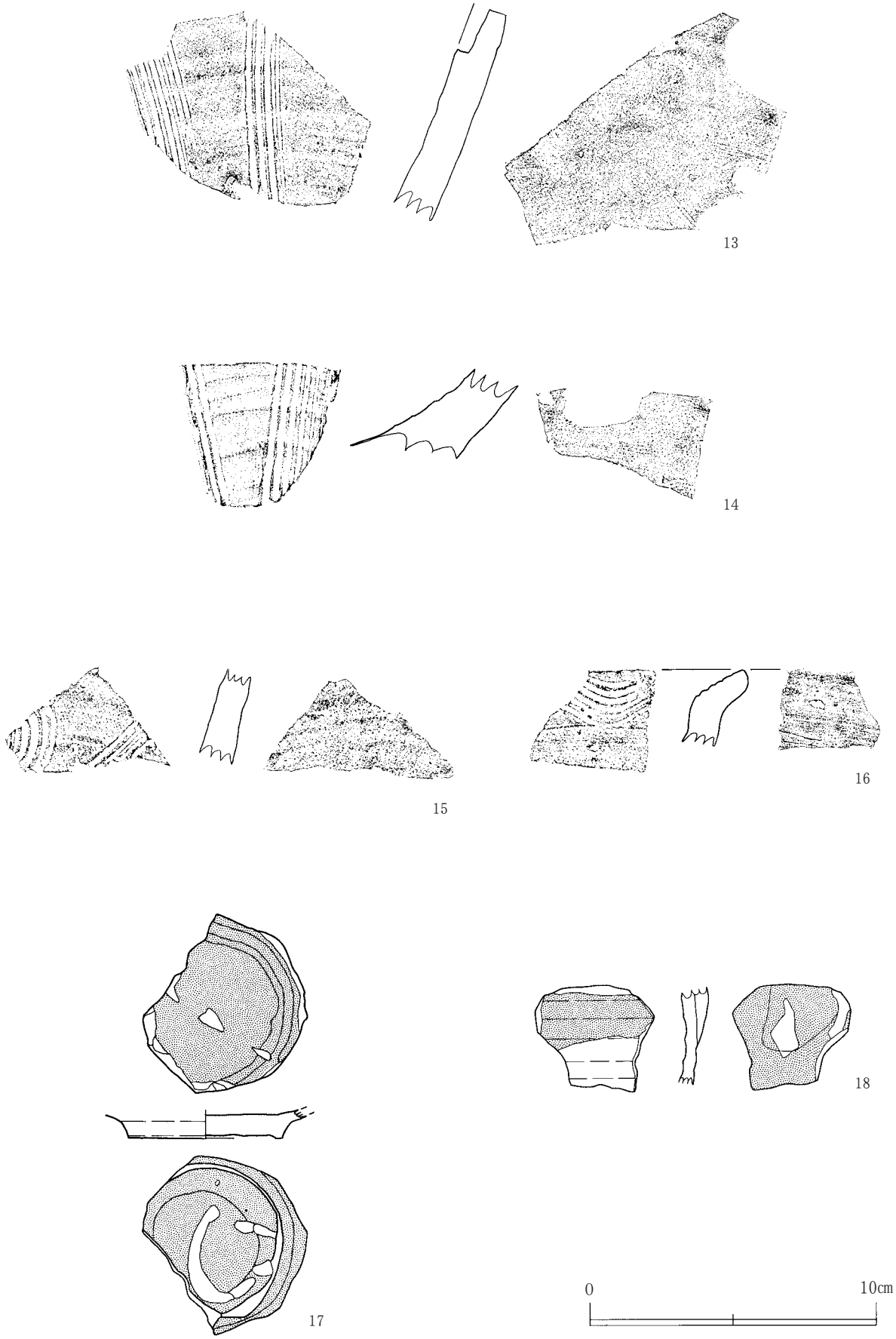
（１）陶器

珠洲系陶器の擂鉢片が４点（第19図13 ～ 16、図版10－２、図版11－１）、瀬戸・美濃産陶器片２点（第19図17・18、図版11－１）が出土した。

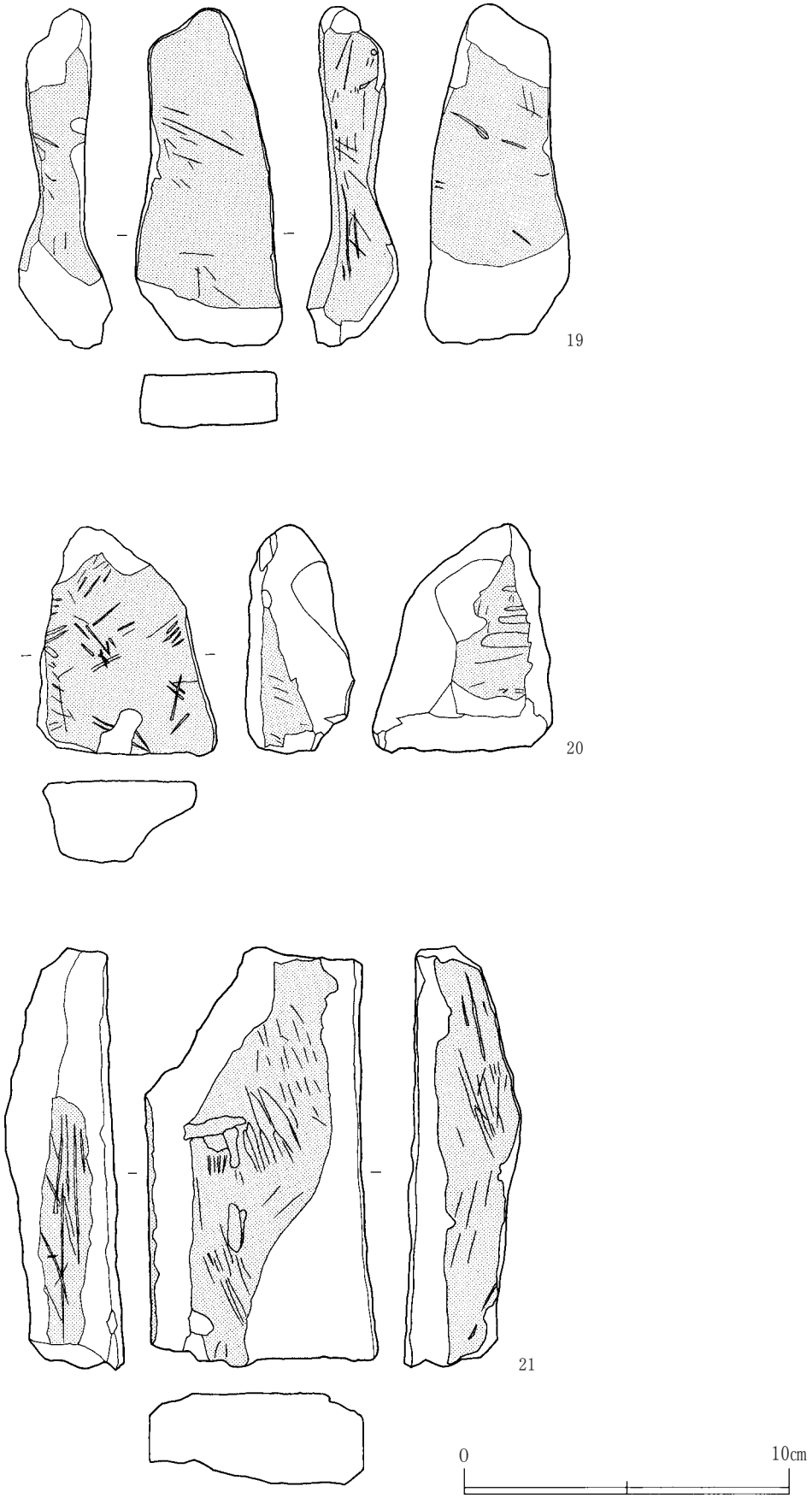
13はＭＥ50グリッドの第Ⅱ層から出土した胴部片である。成形はロクロで行われ、成形後の調整は外面には認められないが、内面には４条ないし５条を一単位とする卸目が施されている。胎土は砂粒を多く含み緻密で、焼成は良好である。色調は外面・内面ともに灰色である。14はＭＢ48グリッドの第Ⅱ層から出土した胴部片である。成形はロクロで行われ、成形後の調整は外面には認められないが、内面には６条を一単位とする卸目が施されている。胎土は砂粒を多く含み緻密で、焼成は良好である。色調は外面・内面ともに灰色である。15はＭＡ47グリッドの第Ⅲ層から出土した胴部片である。成形はロクロで行われ、成形後の調整は外面には認められないが、内面には４条ないし６条を一単位とする卸目が施されている。胎土は砂粒を多く含み緻密で、焼成は良好である。色調は外面・内面ともに灰色である。16はＬＲ48グリッドの第Ⅲ層から出土した口縁部の破片である。成形はロクロで行われ、成形後の調整は外面に認められないが、口唇部内面には６条を一単位とする卸目が波状に施されている。胎土は砂粒を含み緻密で、焼成は良好である。色調は外面・内面ともに暗灰色で、内面には自然釉がかかっている。17はＬＰ45グリッドの第Ⅱ層から出土した小皿の底部片である。全面に灰釉が施されている。高台は削り出しで、底面内外には重ね焼きの際の胎土目痕が認められる。18はＬＬ44グリッドの第Ⅱ層から出土した。外面には全面に灰釉が施されており、装飾（取手か？）を貼り付けた痕跡が認められる。内面には灰釉が施されている部分と無釉の部分がある。器種は香炉もしくは火器と考えられる。

（２）砥石

砥石が３点（第20図19 ～ 21､図版11－２）出土した。19はＬＪ43グリッドの第Ⅱ層から出土した。大きさは残存長10.5cm、幅4.5cm、厚さ2.9cmであり、石材は凝灰岩である。両面および両側面を使用面としており、そのうち両面は使用が著しくやや湾曲している。20はＬＫ45グリッドの第Ⅲ層から出土した。大きさは残存長7.1cm、幅5.6cm、厚さ3.4cmであり、石材は凝灰岩である。両面および側面の一面に使用面が認められる。21はＬＴ48グリッドの第Ⅱ層から出土した。大きさは残存長13.0cm、幅7.1cm、厚さ3.7cmであり、石材は凝灰岩である。片面および両側面に使用面が認められる。



第19図　遺構外出土遺物（３）



第20図　遺構外出土遺物（４）

第５章　自然科学分析

第１節　放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ
伊藤茂・尾嵜大真・丹生越子・廣田正史・山形秀樹・小林紘一
Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani・菊地有希子

はじめに

秋田県仙北市角館町雲然字山口に位置する月見堂館跡のかまど状遺構より検出された炭化材について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。なお、同じ試料を用いて樹種同定も行っている（樹種同定の報告参照）。

試料と方法

測定試料の情報、調製データは第７表のとおりである。

試料は、かまど状遺構であるSO01底面の炭化物層から出土した試料No.1（PLD-17734）と同じくかまど状遺構であるSO03の炭化物層から出土した試料No.2（PLD-17735）の２点で、いずれも最外年輪以外の部位不明の炭化材である。試料の炭化材は燃料材であったと考えられている。どちらの遺構からも土器などの遺物は出土しておらず、遺構の年代は不明である。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた14C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、14C年代、暦年代を算出した。

第７表　測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD－17734	試料No. 1 遺構：ＳＯ01(かまど状遺構) 層位：底面の炭化物層	試料の種類：炭化材(ブナ属) 試料の性状：最外以外部位不明 採取位置：外側－４年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム：0.5N，塩酸1.2N)
PLD－17735	試料No. 2 遺構：ＳＯ03(かまど状遺構) 層位：底面の炭化物層	試料の種類：炭化材(クワ属) 試料の性状：最外以外部位不明 採取位置：外側－２年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム：1N，塩酸1.2N)

結果

第８表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ13C)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した14C年代を、第21図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていな

い値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。14C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。14C年代（yrBP）の算出には、14Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した14C年代誤差（±1σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の14C年代がその14C年代誤差内に入る確率が68.2％であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5568年として算出された14C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、及び半減期の違い（14Cの半減期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

14C年代の暦年較正にはOxCal4.1（較正曲線データ：INTCAL09）を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された14C年代誤差に相当する68.2％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は14C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

第８表　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	δ^{13}C（%）	暦年較正用年代（yrBP±1σ）	^{14}C年代（yrBP±1σ）	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ歴年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD－17734 試料No. N0. 1	－24.44±0.22	811±21	810±20	1219AD(68.2%)1254AD	1185AD(95.4%)1269AD
PLD－17735 試料No. N0. 2	－25.08±0.20	923±21	925±20	1045AD(42.9%)1095AD 1120AD(18.6%)1141AD 1148AD(6.7%)1156AD	1035AD(95.4%)1162AD

考察

各試料の暦年代較正結果のうち、2σ暦年代範囲（確率95.4%）に着目して結果を整理する。

かまど状遺構SO01の試料No.1（PLD-17734）は、1185-1269 cal AD（95.4%）の暦年代範囲を示した。これは12世紀後半～13世紀後半の暦年代で、平安時代末～鎌倉時代に相当する。かまど状遺構SO03の試料No.2（PLD-17735）は、1035-1162 cal AD（95.4%）の暦年代範囲を示した。これは11世紀前半～12世紀後半で、平安時代に相当する。

ただし、今回の試料はいずれも最外年輪を含まない試料であり、結果の解釈には注意を要する。木材の場合、最外年輪部分を測定すると枯死・伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると最外年輪から内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。したがって、いずれも最外年輪以外の部位不明である今回の試料は、古木効果の影響、つまり試料が実際に枯死・伐採された年代よりも古い年代が得られている可能性を考慮する必要があり、それぞれ12世紀後半～13世紀後半かそれよりもやや新しい時期、11世紀前半～12世紀後半かそれよりもやや新しい時期に枯死・伐採された木材であったと考えられる。

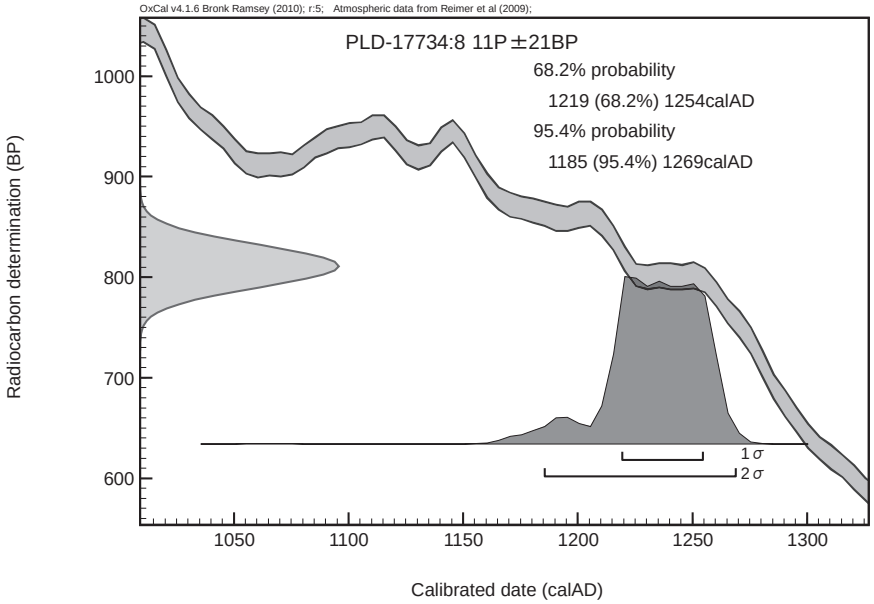
参考文献

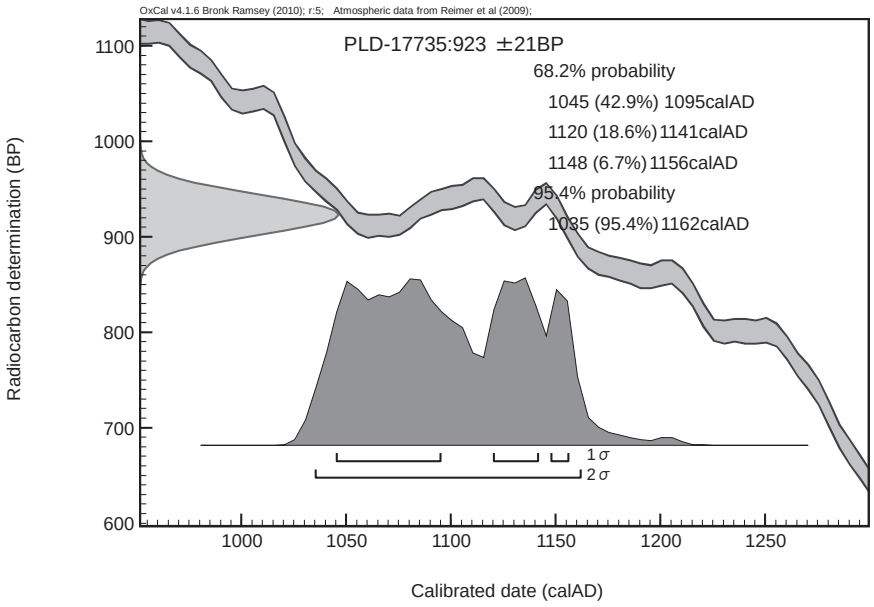
Bronk Ramsey, C.（1995）Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.

Bronk Ramsey, C.（2001）Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」：3-20，日本第四紀学会．

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E.（2009）IntCal09 and Marine09 Radiocarbo
n Age Calibration Curves, 0?50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111-1150.





第21図　暦年較正結果

第２節　月見堂館跡出土炭化材の樹種同定

小林克也（パレオ・ラボ）

はじめに

月見堂館跡は、仙北市角館町に所在する中世城館跡である。当館跡では竪穴住居跡やかまど状遺構などが検出され、時期不明のかまど状遺構では炭化材が出土した。ここではかまど状遺構で出土した炭化材の樹種同定を行った。また同一試料を用いて、放射性炭素年代測定も行われている（放射性炭素年代測定の項参照）。

試料と方法

試料は、かまど状遺構であるSO01とSO03で出土した炭化材各1試料、計２試料である。試料内には複数点の破片状の炭化材がみられたため、樹種同定の前に実体顕微鏡下で横断面の観察を行った。その結果、SO03の試料内には2種類の樹種が確認できたため、同定試料は計３点となった。遺構の時期は、放射性炭素年代測定の結果、平安時代～中世の年代値が得られた（放射性炭素年代測定の項参照）。

炭化材の樹種同定は、試料の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台に両面テープで固定した。その後イオンスパッタにて金コーティングを施し、走査型電子顕微鏡（KEYENCE社製　VE-9800）にて検鏡および写真撮影を行った。なお、同定試料の残りは秋田県埋蔵文化財センターに保管されている。

結果

同定の結果、広葉樹のアサダとブナ属、クワ属の３分類群が産出した。SO01ではブナ属が、SO03ではアサダとクワ属が産出した。同定結果を第９表に示す。

第９表　月見堂館跡出土炭化材の樹種同定結果

試料No.	出土層位	層位	樹種	備考	年代測定番号
1	ＳＯ01	６層	ブナ属	複数破片あり いずれもブナ属	PLD－17734
２－１	ＳＯ03	４層	アサダ	複数破片あり アサダとクワ属がみられる	－
２－２			クワ属		PLD－17735

次に、同定された材の特徴を記載し、全試料の走査型電子顕微鏡写真を示す。

（1）アサダ　Ostrya japonica Sarg.　カバノキ科　図版12　1a-1c(No.2-1)

小型の道管が単独ないし2～6個放射方向に複合してやや密に散在する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状となる。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で、幅1～4列となる。

アサダは北海道中南部から九州にかけての温帯から暖帯上部に分布する落葉高木の広葉樹である。材は重硬で割れにくく、切削加工等は困難である。

（2）ブナ属　Fagus　ブナ科　図版12　2a-2c(No.1)

小型の道管が単独ないし2～3個複合し、密に散在する散孔材である。年輪の終わりでは道管は径を減じる傾向がみられる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、1～4列のものと広放射組織

がみられる。

ブナ属にはブナやイヌブナがあり、冷温帯の山林に分布する落葉高木の広葉樹である。代表的なブナの材は重硬で強度があるが、切削加工は困難でない。

（3）クワ属　Morus　クワ科　図版12　3a-3c(No.2-2)

年輪の始めに大型の道管が数列並び、晩材部では徐々に径を減じた道管が多数複合し、斜めに断続して疎らに散在する環孔材ないし半環孔材であるが、試料は微破片となり、大型の道管が確認できなかった。軸方向柔組織は周囲状となる。放射組織は上下端１～３列が方形となる異性で、１～６列となる。

クワ属にはヤマグワやマグワなどがあり、温帯から亜熱帯に分布し日本全国の山中にみられる落葉高木の広葉樹である。材はやや重硬で保存性は高いが、切削加工がやや困難である。

考察

同定の結果、かまど状遺構であるSO01ではブナ属が、SO03ではアサダとクワ属が産出した。試料は遺構底面の炭化物層から採取されたもので、燃料材の残渣と考えられている。

ブナ属は重硬で加工性が良い樹種であるが、薪炭材としても多く利用されている樹種である。秋田県下では、月見堂館跡とは距離が離れるが、横手市の姥ヶ沢窯跡では平安時代の土器焼成遺構10基で出土した炭化材24点について同定が行われ、ブナ属15点、クリ６点、ナシ亜科、サカキ、ヌルデが各1点産出している（植田，2001）。アサダやクワ属も燃料材として利用されることが多い樹種である。いずれも産出数が少なく、花粉分析も行われていないため、推測の域を出ないが、本遺跡のかまど状遺構では、遺跡周辺に生育する樹種を無作為に利用していた可能性が考えられる。

引用文献

植田弥生（2001）出土炭化材の樹種同定．秋田県埋蔵文化財センター編「姥ヶ沢窯跡」：70-73，秋田県埋蔵文化財センター

第６章　まとめ

月見堂館跡の発掘調査は、一般国道46号角館バイパス建設事業に係った遺跡北部の東向きの緩傾斜面について実施した。調査の結果、縄文時代と中世の遺構と遺物が検出された。以下には遺構と遺物について若干ふれてまとめとする。

【遺構について】

縄文時代の遺構は、土坑２基と配石遺構１基である。両遺構とも時期を確定できる遺物が出土しなかったが、遺構外周辺から縄文時代前期と後期の土器が出土していることから、そのいずれかの時期に属するものと思われる。

中世の遺構は、竪穴建物跡１棟、掘立柱建物跡１棟、かまど状遺構２基、溝跡５条、柱穴様ピット92基である。これらの遺構のうち、検出された２基のかまど状遺構は、中世の遺跡で検出例が増加してきた遺構であり、その構造は焚口部・燃焼部・煙道部からなる遺構である。検出されたかまど状遺構の類例としては、県内では鹿角市乳牛平遺跡・妻の神Ⅲ遺跡・当麻館跡・石鳥谷館跡、大館市餌釣遺跡、能代市竜毛沢館跡、秋田市下夕野遺跡・古野遺跡、大仙市四十二館跡・岳下遺跡・薬師遺跡などがあげられる。

【遺物について】

縄文時代の遺物は、土器・石器が出土した。土器の時期は前期と後期である。中世城館の時期にあたるものとしては、珠洲形陶器の擂鉢、瀬戸・美濃産の灰釉陶器の皿と香炉か火器と思われるものがある。時期は前者が13世紀前半～14世紀か15世紀で、後者は16世紀である。このほか中世以降と思われる砥石が出土している。

以上、月見堂館跡は、出土した遺物に拠って縄文時代前期・後期に利用された場所であり、その後鎌倉時代から室町時代（戦国期）にも人々の暮らしが営まれていたことが判明した。しかし、今回の調査では、館の性格やその核心部に近づくような資料を見出せなかった。今後、館の平坦面(郭面)などの調査によって、今回の調査で検出された柱穴様ピットなどの用途や、館の具体的な様子が判明することを期待したい。

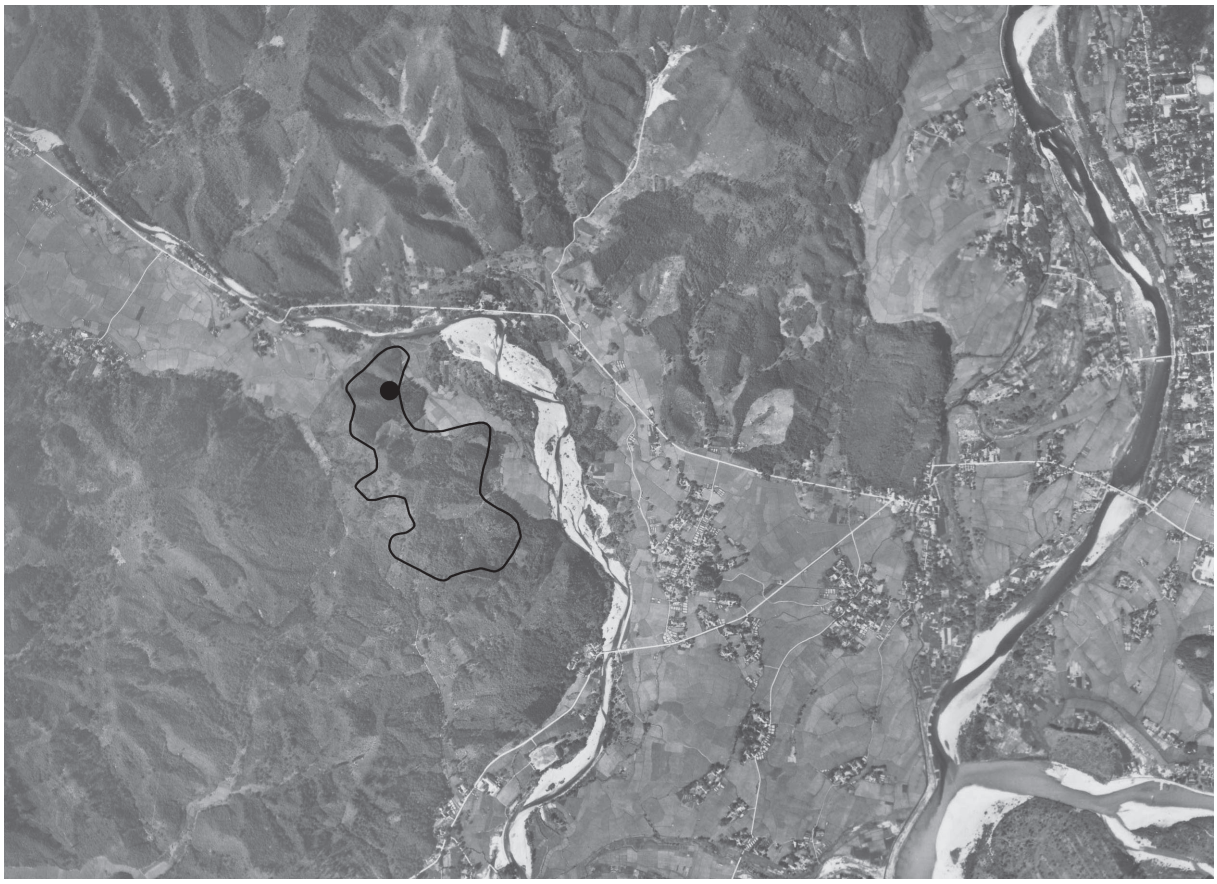
引用・参考文献

秋田県教育委員会　『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅷ－妻の神Ⅰ遺跡・乳牛平遺跡－』　秋田県文化財調査報告書第107集　1984（昭和59）年

秋田県教育委員会　『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅸ－妻の神Ⅲ遺跡－』　秋田県文化財調査報告書第108集　1984（昭和59）年

秋田県教育委員会　『石鳥谷館跡－県道大葛鹿角戝建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』　秋田県文化財調査報告書第279集　1998（平成10）年

秋田県教育委員会　『薬師遺跡－一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』　秋田県文化財調査報告書第388集　2005（平成17）年



1　遺跡遠景上空から（真上）：昭和24年米軍撮影

2　遺跡全景上空から（真上）

図版2

1　調査前の様子（西→）

2　調査後の様子（西→）